タイランドエッセイ

第１巻

あなたは知っていますか？

この驚愕の事実、感動の 15 ケ月

微笑みの国タイからの発信

どこへ？　あの誠実な日本の皆様へ

著者：青沼“まんたん”祐子

編集：青沼“ぷんぷん”修司

目次

第１部　行かないわよ……1

タイ 1　行かないわよ
タイ 2　送ってみたらどうでしょう
タイ 3　資料がない
タイ 4　予防注射
タイ 5　履歴書
タイ 6　パスポート
タイ 7　虹

第２部　寡黙な藤岡琢也さん……5

タイ 8　空港のミドリ
タイ 9　最初の晩
タイ 10　時計
タイ 11　航空便が来ている
タイ 12　寡黙な藤岡琢也さん
タイ 13　椰子の実トイレ

第３部　レディースクラブは正しい……10

タイ 14　着任
タイ 15　らっきょうの醤油付け
タイ 16　PMY ホテルの夜
タイ 17　オマケの苦しみ
タイ 18　レディースクラブは正しい
タイ 19　坂本マーケット
タイ 20　トゥモロ

第４部　家庭訪問……18

タイ 21　家庭訪問
タイ 22　あなたは水をことわれるか
タイ 23　お父さんは中国人
タイ 24　パイナップルとバナナ
タイ 25　国際派のクンチャイ
タイ 26　漁師のお父さん
タイ 27　クンチャイの家族構成

第５部　可憐なまんたん……25

タイ 28　海水浴

タイ 29　可憐なまんたん
タイ 30　出社
タイ 31　ぷんぷんも頭を抱える

第 6 部　引越し・・29

タイ 32　赤むけのおてて
タイ 33　引越し
タイ 34　金ゴリラ再び
タイ 35　ご近所　～逆もまた真なり～
タイ 36　輸送事情
タイ 37　スターマーケット　～カブト蟹～
タイ 38　初めての飯炊き

第 7 部　ドライビングレッスン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

タイ 39　ドライビングレッスン
タイ 40　運転免許証

第 8 部　レディースクラブ入会のお勧め・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

タイ 41　レディースクラブ入会のお勧め
タイ 42　歓迎会
タイ 43　パーティと洗濯機の因果関係

第 9 部　コーヒーモーニング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

タイ 44　フードランド
タイ 45　コーヒーモーニング
タイ 46　ノンヌッチ・ヴィレッジ
タイ 47　水

第 10 部　インディアン大王・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

タイ 48　首デビの首
タイ 49　レディースクラブのランチョン
タイ 50　ぞうきんの運針　～インディアン大王～

第 11 部　コンドミニアム動物記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

タイ 51　コンドミニアム動物記　蟻
タイ 52　コンドミニアム動物記　とかげちゃん
タイ 53　コンドミニアム動物記　その他

第 12 部　哲学メカと力自慢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

タイ 54　テレビ
タイ 55　哲学メカと力自慢
タイ 56　クンコンの恋

第 13 部　タイ伝統舞踊の公演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

タイ 57　タイ伝統舞踊の公演
タイ 58　殺人事件

第 14 部　ラヨンマーケットの攻略法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

タイ 59　ラヨンマーケットの攻略法
タイ 60　お花屋さん
タイ 61　イカ屋のおばちゃん
タイ 62　野菜屋さんの野菜
タイ 63　なまず屋のおねえさんの神技
タイ 64　蟹
タイ 65　豚の展示会
タイ 66　サバ
タイ 67　椰子の実
タイ 68　チリ

第 15 部　もの言うこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

タイ 69　もの言うこと
タイ 70　お集まりだらけの謎
タイ 71　仕事の違い

第 16 部　金行・・58

タイ 72　銀行
タイ 73　金行

第 17 部　初めてのホームパーティ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

タイ 74　まんたんランチを主催する
タイ 75　初めてのホームパーティ
タイ 76　国際大盆踊り大会
タイ 77　レディースのふるまい

第 18 部　ロイヤルの雛壇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

タイ 78　タイマッサージ

タイ 79　ロイヤルの雛壇
タイ 80　いかがわしいなんてとんでもない

第 19 部　お寺訪問・・66

タイ 81　ピーのこと
タイ 82　お寺訪問

第 20 部　バンムングラ病院・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

タイ 83　肝炎
タイ 84　バンムングラ病院
タイ 85　問診票
タイ 86　カバ A

第 21 部　青いバンコック・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70

タイ 87　青いバンコック
タイ 88　かわいい弁護士さん
タイ 89　ホテルの前のできごと
タイ 90　いいなあ、バンコック

第 22 部　喪に服してるわけ？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

タイ 91　王母殿下崩御
タイ 92　出家 120 人
タイ 93　喪に服してるわけ？

第１部　行かないわよ

タイ１　行かないわよ

アジアは行かない、という家族が多い。まして、首都のバンコクでなければ行かない。

まんたんも「そう、行ってらっしゃーい！」っていう具合であった。のであるのに、まんたんが行ったのは、ぷんぷんの巧妙な作戦によるものであった。

「まんたん、飛行機に乗ってどこ行くの？」
「運転手さんのチュラロンコンが待っているよ」

行った場所　ラヨン(Rayong)

本当のチュラロンコン
立派な王様です
（在位 1868-1910）

これを毎日、聞かされているうちに、まんたんはだんだん行くような気になってしまった。

極め付きは、「僕のご飯はどうなるんだ！」という、実に日本的なぷんぷんの要望であった。その時、まんたんは、もし自分が行かなくて、現地でぷんぷんの身に何かあったら、ご飯を作ってあげなかったことを、後悔するんじゃないかと、実にまんたん的な心配をした。

帰国して、ぷんぷんは言われたそうである。「よく、奥さんを説得できたねぇ」と。ぷんぷんは答えたそうである。

「洗脳しました」と。

タイ２　送ってみたらどうでしょう

荷物は船便と航空便で、それぞれ出発の１ヶ月前、２週間前に送る。家具類は一切送らないんだが、お客様用食器など、大荷物になった。お薬類だけで大変な金額になった。食品も、とにかく、お台所にあるものを１個、１本、１袋と準備した。が、タイでは食品、薬品の持込みが禁止というのだ。

大使館に問い合わせた。荷物で送ってよいのかどうか、聞くと、「送ってみたらどうでしょう」とやさしいお返事で、なんだか、気の抜けるような感じだったが、ほっとした。

しかし、ほっとしてはいけなかったのだ。やさしさは時にいい加減さに通じて、まんたんはそれを骨身に染みて思い知らされることとなった。

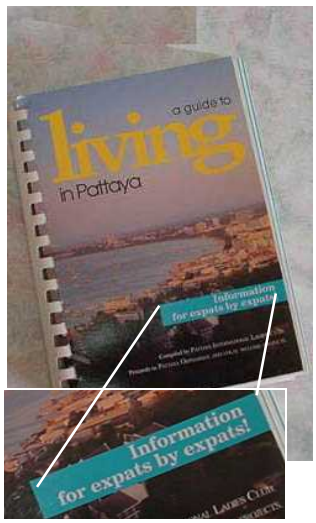
タイ３　資料がない

「あなたの行くとこ、ガイドブックにない」と心配した友達に言われて、まんたんは自信をもって、「いずれ、まとまって資料が来るから大丈夫」と答えた。

けれども、資料はなかなかこなかった。支店とか、駐在員の人のいるところだともう蓄積があるので何の心配もないのだが、国自体に初めて出かけるケースだったので、不安になった。

やっと来たのは、行くにあたっての膨大な契約書の写しと、あちらのレディース・クラブの製作した１冊の英語の冊子だった。

本を見て、なぁんだ、ホテルもマーケットも病院もあるじゃないか、と嬉しくなった。「スネーク・バイト」というような項目は、今思うと、いやな予感がして読みとばしていたのだ。



Information for expats by expats

本を製作したレディース・クラブと、ふかーいお付き合いになるなんて考えもしなかった。

タイ４　予防注射

熱帯なので、出発前に予防注射が必要だった。肝炎、日本脳炎、狂犬病など、必要ないのは黄熱病とマラリアぐらいであった。

予防注射が体に影響がないというのは嘘である。少なくともまんたんの場合は甚大であった。短い期間にたくさんの注射を打つので、無理があったのかも知れない。

２度目の狂犬病を打つ前に、40 度近い熱と吐き気で近くの大学病院にお世話になることになった。「出発が近いので、狂犬病ぜひ接種して行きたいんですけど」というと、先生は「この状態でそんなことを言っている場合ではありません」と怒るのであった。

まんたんは狂犬病の２回目を受けず不完全であったので、なんか、半分狂犬になったような気がした。

予防接種証明書
約１ケ月で８回の接種
日本脳炎、狂犬病、破傷風、
Ｂ型肝炎、Ａ型肝炎の５種類

タイ５　履歴書

ぷんぷんの履歴書は、そりゃ必要だろう。驚くほど詳細な履歴書が求められた。

が、まんたんのは必要だろうか。必要だったのである。英語で書いたことなんてなかったので、できてきたのを見て驚いた。

まんたんの学校の英語名は日本語と違っていたのである。そこには、はっきりとキリスト教に基づく学校であるとあった。日本語ではそんな気配はないのである。

本当に驚いた。自分のことでも知らないことがあるんだなぁと驚いたのである。

タイ６　パスポート

出かけるにあたって、まんたんとぷんぷんは、余りに先様の様子がわからなかったので、居直って次のような申し合わせに至った。

タイ使用前、まだ日本人

日本人なので、タイ人にもアメリカ人にもなる必要はない。ただ、日本人として日本において許されないような態度や行動はどこでも決してとるまい。

それがへんてこりんであっても、お互いさまである。先様がわざわざ日本人を呼んだのだから、それでいいのである。暮らしているうちに自然に適応していこう。ただ、タイの主はタイの人だから、尊重しなければならない。まんたんとぷんぷんは、つつましいけれど、充足した日本人であったのだ。

タイ使用前、まだまだ日本人

そして、改めてパスポートを眺めた。そこにはこう、あった。

「日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を　与えられるよう、関係の諸官に要請する。日本国外務大臣」

なんとなく、空港で出す「切符」みたいに思っていたので、考えるところがあった。

基本的に外国にあっては、この要請がなければ、故障のない旅行も保護扶助も与えられることはないということであった。

そして、パスポートの表紙には日の丸ではない紋章があるのであった。

タイ７　虹

ビジネスクラスに乗るなんて、初めてだったので、まんたんはとてもご機嫌だった。

機内食（和食）も大変結構で、それがまともな日本の食べ物のとりあえず最後になるなんて、深く考えずにおいしくいただいた。後にこの機内食のことをよく思い出した。機内食で思い出したなんてあれぐらいである。

成田空港、まだ日本

だいたいが引っ越すとき、移動の飛行機に乗るときはまんたんはいつもご機嫌なのだった。もう、片付けも荷造りも準備もないんだ、それだけで気持ちが解放されて晴れ晴れするのだった。

着陸に入って、高度が下がると、茶色の地面の方々に赤い屋根のお寺が見えた。そして、目の下に大きな虹を見た。なんだか、まんたんのこれからを祝福しているような気になってうれしくなった。要は、やはり興奮していたのである。

ビジネスクラス搭乗の証拠
仕事以外では乗れません

エコノミークラス以外の座席に乗ったのは、あれが最初で最後であった。

ぷんぷんが、恥ずかしいから「今のところ」と付けろというので、今のところと言っておく。

第２部　寡黙な藤岡琢也さん

タイ８　空港のミドリ

空港はどこでもそうだけれど、そこそこの空気の違いみたいなものがある。日本の中でも、千歳空港に降りたときと、関西空港に降りたときと、やはり違う。

タイのドンムアン空港はとても清潔だった。が、やはり空気が違った。むっとする湿気、少し黴臭いような臭い、それと嗅ぎなれない香辛料の匂いのようなものがあった。そして、成田に比べるととても静かであった。

さて、税関申告のとき、一つだけ気がかりなことがあった。ぷんぷんが手持ちにしたノートパソコンだった。そのころは、今よりパソコンが高かったような気がする。まんたんとぷんぷんは、いくら税金がかかるのか心配したけれど、個人使用のものだといってまけて貰おうと思っていた。

それで、申告ありの赤いランプのついた窓口にいこうとしたら、税関のひとが、何か言っている。聞き取れないのでもう一度言ってくれるようにお願いすると、「ミドリ」と日本語を言っているのであった。つまり、申告するものがない人が行く緑色のランプのところに行けと言っているのであった。

せっかく申告するというのに、日本人だから親切にしてくれるのかと思って、タイは何て親切な国だろうと思った。税金を払わなくていいのはもっとうれしかった。

で、はたと思い至ったのである。あの税関の人は、なぜ、まんたんとぷんぷんが日本人だとわかったのだろうと。これは、タイにいる間中、ずっとつきまとった疑問であった。どこにいっても、すぐ、わかるらしいのである。「イープン、イープン」という声が聞こえ、日本人だとばれてしまうのであった。まるで、背中にイープン(日本人)と書いた旗印を背負っているようであった。

タイ９　最初の晩

空港近くのホテルにしたのは、夜、ドンムアンからバンコック市街までタクシーに乗った日本人の女の人が殺されたからだった。

ここに２晩泊まって、最終目的地の街に向うのであった。

空港のすぐ前なので専用通路を渡ってすぐに着いた。が、すぐにチェックインするわけにはいかなかったのである。カウンターの前には長蛇の列であった。ふつう、こんなに待っている人がいたら、人を増やすとかすると思ったが、悠然と手を早めることなぞはないのであった。

最初の夜の食事
まだ胃の中は日本人

そのうち、ある人（1）がお金はすでに支払っているとホ

テルの人に言って譲らず揉め始めた。列はさらに長くなった。

ある人（2）は床に座り込んでながーい足を投げ出してしまった。

すぐ前にいたある人（3）は、まんたんに「タイは初めてか？ここはいつもこうだ」と、ふっふっふ、と笑うのであった。

人を見るとどこの国の人か無意識に考えるのはこのときについたクセだと思う。（1）～（3）までの人がどこの国の人かクイズ。答えはこの最後ね。

お部屋に荷物を運んでくれた人に、チップをあげると、合掌して少し身をかがめるワイというタイ風のお辞儀をしてくれた。とても、優雅な儀礼なのだけど、日本円で 80 円くらいのチップであれをしてもらうと、気の毒で申し訳ないような気になるのであった。

お部屋にはランプータンやライチやスターフルーツが山盛りにしてあって、蘭の花も生けてあって、まんたんはまたしても、うれしくなった。

こうしたものが珍しくも何ともないのだということを実感するのにさして時間はかからなかったが、うれしかったのだ。

さっそく、ナイフとフォークを持ってきてもらって食べた。ぷんぷんは食べなかったが、食べた。翌日、まんたんだけ、下痢だった。

ランプータン売り
場所はまだ知らないラヨン市場

クイズのお答え（1）独　（2）米　（3）英

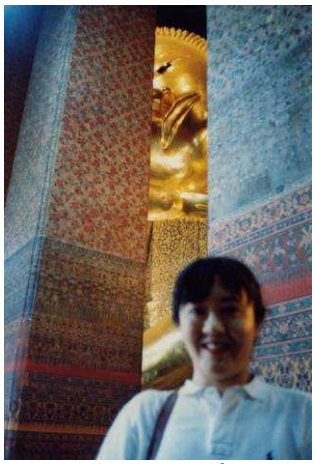
タイ 10　時計

着いた翌日、領事館に在留届を出して、紹介してもらった銀行と会社にご挨拶に行って、バンコックをほっつきあるいた。長くよその国にいる場合、どうやら頼りになるのは銀行と商社らしかった。

銀行で日本人のスタッフに会って、タイのお話を聞いたが、その人は家族帯同で何年もバンコックにいるので、何の心配もないというお話しだった。

まんたんはとても心強かった。

そして、そこで時計を見た。ちょうどまんたんの身長位ある大きな振り子の壁時計だった。時計の側面には、その銀行の昔の名前と明治 13 年という文字が書いてあった。振り子が明治 13 年から、ずうっと時を刻み続けてきたんだなぁと思うと、ふっと涙ぐみそうになった。


まんたん、ワットポーに
後ろが涅槃象、前ではありません

トゥクトゥク
要するに三輪バイク

飛行機も電気も水道もない頃から、日本人とその家族がこの暑い国にいて、大変だったろうと、病気になった人も亡くなった人もいたんだろうと思った。

実際、よく日本人の亡くなる国であった。が、しみじみの思いも忘れちゃって暁の寺（ワット・アルン）に登り、ワット・ポーに詣で、お寺、教会、墓地の類いが好きなまんたんは大いに満足し、日本の昭和30年台くらいかなぞと勝手によそさまの国を判定し、トゥクトゥクという小さな三輪自動車のタクシーで幸せに風に吹かれた。

その日のことは、機内食の和食と同じくらい欲思い出した。どういう思い出し方かと言うと、「昔はものを思わざりけり」という思い出し方だった。

,

タイ 11　航空便が来ている

バンコックに着いて3日めの朝は、とても忙しかった。日本から送った荷物を運送屋さんが受け取るのにパスポートが必要になるので、運送屋さんにパスポートを渡し、手続きを済ませてもらって、パスポートを受け取り、ホテルをチェックアウトし、ラヨンからの迎えを待つのであった。

運送屋さんは早くに来てくれ、すぐにパスポートを届けてくれるという。その間にチェックアウトを済ませることにした。チェックインのときに、えらく時間がかかるのがわかったからである。

ぷんぷんがフロントの列に並んでいる間、まんたんはお荷物仮預かり所の前で、スーツケースをさりげなく見張っていた。と、ボーイさんの後ろに見たことのあるようなダンボール箱があるではないか。そう、航空便で送ったはずの7個の荷物。間違いない。

まんたんは驚天した。船便、航空便の荷物を受け取りに運送屋さんがパスポートを持って行ったはずだ。おかしい。なんで、航空便がもう、ホテルに着いている。どうなっているんだ。あの荷物は迎えの車には積み切れない。

ぷんぷんは「来てたんだねぇ」と平然で、パスポートを返しに来た運送屋さんに、航空便分も船便といっしょに、ラヨンに運んでくれるように頼んだ。

まんたんはどうも釈然としなかった。予定、計画どおりに物事が進むのがとても好きである。そうでないと、不安になるところがある。

この朝から、実際上日本の管理下を離れた。現地の会社手配に入ることになったのである。それは、予定、計画がまんたんの考えるような範囲で成立することがあまりないということを意味するのだった。

これが慣れるまで、とてもつらかった。それだけで疲れた。

タイ 12　寡黙な藤岡琢也さん

「ホテルまで迎えが行く。ジムがホテルで出迎える」と、連絡があったので、ホテルにジムという人が迎えに来てくれるのだと思った。

チェックアウトも済み、ロビーで待っていたけれど、それらしい人はこない。と、藤岡琢也さんという俳優さんそっくりな人が、ぷんぷんの名前を書いた紙を持って近づいてきた。

「あなたはジムさんですか」
「会社からの迎えの人ですか」
「ラヨンまで行くのですが」
とさまざまに言っても、寡黙な藤岡琢也さんは
「うー」
「うー」
「うー」
というだけであった。

名前の感じからなんだか違うような気がして、ぷんぷんはロビーにいたちょっと偉そうなホテルの人にラヨンの会社に電話を繋ぐように頼んだ。その人はすぐ電話してくれたが、電話が繋がらないと言うのだ。

突然ですが、電話があるということは素晴らしいことです。しかし、電話がいつも繋がるとは限りません。いつもどこへでも電話が繋がるということは、これは奇跡的に幸せなことです。

仕方がないので、寡黙な藤岡琢也さんの車に乗って、ラヨンに向かった。

タイ 13　椰子の実トイレ

バンコックの目抜き通りは、高層ビルが立ち並び、東京と同じだった。寡黙な藤岡琢也さんが、猛烈なスピードで車を運転するので、じきにバンコックを過ぎてしまった。

次第に人家がなくなるし、立派な道路の両側には椰子の木しかなくなるし、虎の巻「タイ語自由自在」を開いて藤岡さんに話し掛けても、「う」としか言わないし、まんたんもぷんぷんも心細くなって、黙ってしまった。

が、トイレに行きたくなって藤岡さんに「なむ、なむ」と何度も言って、やっとガソリンスタンドに停めてもらった。スタンドは大きくて、日本のコンビニみたいなお店があって、食べ物や飲み物を売っていて、ほっとした。リポビタンＤを売っていたのには、感動した。感動して二人で飲んだ。

藤岡さんに「コーク？」と言うと、「う」と言ってミネラルウォーターのペットボトルを指すので、藤岡さんにはお水を飲んでもらった。

お店の人にトイレの場所を聞いてぷんぷんと左右に分かれた。しかる後、左右から合流したまんたん

とぷんぷんは期せずして同じ言葉を発した。「すごかった」

スタンドのトイレはおしゃがみ式の水洗トイレだった。

電気がないので、暗い。目が慣れると、耳付き洗面器のような陶器の便器があって、右手に金網のクズカゴ、左手に水槽があった。水槽の中に何か浮いているので、よく見ると半分に割った椰子の実に棒を 1 本刺した柄杓。金網の中には「内容物」付着の紙がたくさんあった。

悩んだ。このトイレを使う正しいお作法は？判定できないまま、

する、水で洗う、紙で拭く、紙をカゴに捨てる、便器に水を流す、手を洗う、

ということで許してもらおうと思った。水で洗うは省略させてもらった。何だか哀しかった。人間はこんなことでも哀しくなるんだとわかった。

タイのガソリンスタンドの一例でこれは新しい所
初めて行ったスタンドの写真はありませんでした

第３部　レディースクラブは正しい

タイ 14　着任

PMY ホテル右折直前箇所
ホテルはどこ？

バンコクから３時間半ほどで、ラヨンに着いた。街のようだと思ったところで、藤岡さんが突然右折して小さい道に入った。いきなり、未舗装のデコボコ道だった。

しばらくして、いきなり海岸に出て、海際の建物の車寄せで止まった。どう見ても会社ではなくホテルだった。いや、確かに PMY ホテルだった。

ここにチェックインして宿泊するようにとのことだろうと、フロントに行って、予約してあるはずだと言うと、にっこり笑いながら、「予約はありません」というのであった。

ぷんぷんが会社に電話してもらうと、今度はめでたく繋がった。「ようこそ、タイランドへ。ジムがいるから、すべてジムに。休養をとってくれ」で、終わった。

どうなっておるのだ。まんたんは逆上しそうになった。

PMY ホテル、創業者の頭文字？
撮り方によっては結構、立派！

フロントの付近にはだれもいない。藤岡さんは、スーツケースを置いて帰ろうとする気配である。ともかく、チェックインして、荷物を預かってもらって、藤岡さんに頼み込んで、会社に行くことにした。

まんたんは、藤岡さんに逃げられないように、必死だった。ふてくされて、日本語だった。
「あなた、ジムなの？」
「うー」
「すべて、あなたに言うんだって」
「うー」
「予約ないんだって」
「うー」
「とにかく会社に連れてってね」
「うー」

日本の会社では、転勤にあたっては異動後すみやかに会社に出勤して、ご挨拶手続き済ませて着任という感じだから、藤岡さんに会社名を連呼して、連れてってもらった。

受付の人に案内されて行くと、「ようこそ、タイランドへ。疲れてなーい？」と金髪碧眼のまんたんの３倍くらいの容積の女の人が、いきなり抱きしめるのであった。

濃い体の匂いと香水の匂いでまんたんは、申し訳ないけれど、胸が悪くなりそうになった。ヘラクレスの腕のような見事な腕にはふさふさと金色の産毛がたなびいていた。ひそかに、この人は金ゴリラ

と名付けられた。

また、「ジムがホテルで待ってるんだけど」だった。

そのジムはどうしたんだ、ジムは。ジムは 2 時間も前から、PMY ホテルで待っていたのだった。

藤岡さんはジムではなかった。

会社の入口ゲート、立派
王妃様誕生日の時のもの

タイ 15　らっきょうの醤油付け

せめて、ロビーにいてくれればよかったのに、問題のジムは PMY ホテル 1 階のレストランで、のんびり、コーヒーを飲んでいた。せめて、フロントの人が捜してくれればよかったのに、にっこり素晴らしい笑顔を浮かべながら、そんな気の利いたことはしてくれないのであった。

また、「タイランドへ、ようこそ」だった。

タイの国民の祝日が入るので 4 日間、お休みでその後、7 時半まで会社に出勤すればいい。
住まいへの移転は、現在交渉中なので、当分ホテルにいてくれ。
食費、クリーニング代、電話代、ホテルの費用はすべて会社が負担する。
車は会社がレンタカー会社から借り上げるので、ガソリン代、運転手の給与は負担してくれ。
運転手はレンタカー会社を通して雇うが、それでいいか？
運転手はいっぱいいるので、いつでも替えることができる。

そんなことで、話はあっさり済んだ。今朝からの釈然としないところを縷々話したが、「この国ではすべてがそうである。日本のようには行かない。私は、日本に住んでいたことがあるのでわかるのである。」

実は、まんたんは、アメリカ人のジムの腕に刺青があるのが気になっていた。ジムには悪いが、いいイメージではない。そして、日本のどこに住んでいたかを聞いたとき、地名を 2 つ聞いただけで納得した。元軍人さんに違いなかった。

刺青はあったけれど、ジムはほんとうに親切にしてくれた。奥さんはタイの人で、奥さんにも親切にしてもらった。

そして、ジムが我が家の運転手さん、クンチャイを何処からともなく、連れて来た。

例のワイでもって、挨拶してくれたクンチャイを一目見て、まんたんは、らっきょうの醤油付けだと思った。まんたんはらっきょうの醤油付けが大好きだったのである。ニコニコ笑って、とても感じがよかった。

クンチャイ
タイランドエッセイの名わき役

ジムは少し恩着せがましく、英語が少しわかる運転手さんを回したと

言った。ただし、運転手をするのは初めてなので、その点が心配だと言った。

このようにして、クンチャイはまんたんとぷんぷんと一緒にいてくれることになった。エクスパッツ（Expatriates の略称で Expats）と呼ばれる外国人スタッフ（含むぷんぷん）の運転手さんの中で、滞在中ずっと変わらず勤めあげてくれたのは、クンチャイただ 1 人だった。

失踪も逐電もせず、盗みも働かず、事故も起こさず、ま、いろいろあったが、実に素晴らしい運転手さんだった。

ぷんぷんはフフフフ笑っていた。ホンダのシビックに運転手さん付きは珍しいだろうと。

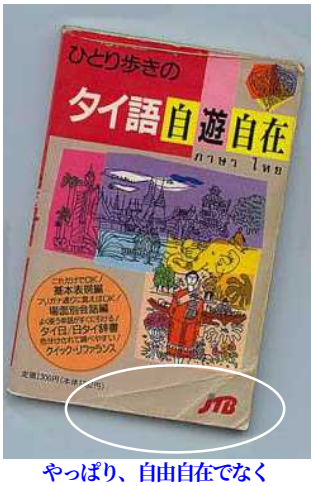
タイ 16　PMY ホテルの夜

疲れ果てて、クンチャイには明日の朝 9 時に、来てくれるように頼んで帰ってもらった。

食事も PMY ホテルで済ます事にしたのだ。1 階のレストランの他に最上階にもレストランがあり、窓からの景色は絶景だった。バンドも入っている。すべてのメニューは英語の表記があり、番号を言えばオーダーできるのだった。

PMY ホテルからの景色、確かに絶景
しかし、すぐ景色ではメシが食えないことに気がつく

虎の巻「タイ語自遊自在」レストラン篇を参考に、トムヤンクンと海老チャーハンとその他よくわからないので、たくさん注文した。バンコクに比べると安くて感動した。200 円くらいで山盛りのが一皿いただけるのである。



やっぱり、自由自在でなく
自遊自在だった
右端に苦闘の跡

タイのたいていのレストランでは、次のようなセッティングになっている。中央に調味料セット。これは、さとう、赤唐辛子、青唐辛子の入ったお酢、ナンプラーに決まっていた。お皿の右脇にスプーン、左脇にフォークが置いてあって、スプーンの上手にコップがあった。

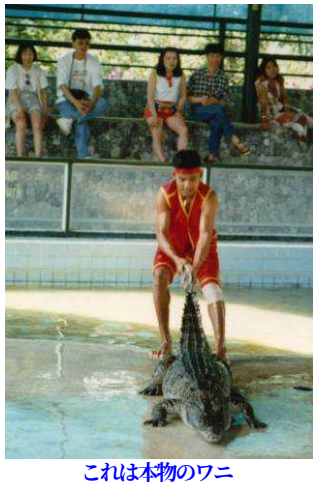
ただし、食器は、誰からともなく「イープン」の声があがると、急遽変更になった。ナイフとお箸が出てくる。タイの人を見ると、スプーンをスプーンとして使い、またナイフの代わりにも使い、とても合理的に思えた。

さて、バンコクと違うのは、値段だけではなかった。バンコクのは何というか、アレンジされているらしく、PMY ホテルのお料理は、ことごとく強烈に辛かった。それと、まんたんの苦手なパクチ（香菜）がふんだんにかけてあった。

パクチをのけて、辛さにむせながら、食べた。あまり辛いと口の周りがクアンクアンほてり、胃の中までぽっぽするのだと知った。食事が辛すぎたのか、疲れすぎたのか、その晩、寝付けなかった。

夜中、おトイレに立って、ドアを開けて、まんたんは、絶叫した。壁を、ピンクと緑のまだらの、30

センチくらいの、ワニが這っていた。


これは本物のワニ
パタヤワニ園で

ぷんぷんは、お義理で「どーしたぁ」と言ったが、半泣きで「ワニがいるー！」と言っても、寝ぼけて「そーか、よしよし」と言うのであった。

ベッドに入られたら嫌だと、ドアを閉めて、自分に、落ち着いて、落ち着いてと言い聞かせながら、対策を考えた。浮かんだ妙案は香水だった。アルコールだから、ワニが忌避して、出て行ってくれるかも知れない。

真ん中にトカゲ、これとも違うらしい
住まいに多くいて慣れるとかわいい

スプレーを手にもう一度おトイレに行くとワニはもう、いなかった。

少しも落ち着いていなかったのである。ホテルの人を呼べばよかったのである。ぷんぷんは、まんたんが寝ぼけたんだと言う。でも、違う。トカゲだろうと言う。

でも、あんな大きなのは絶対にワニと言うべきである。

タイ 17　オマケの苦しみ

4 日間もお休みなので、なんていい会社だろうと思った。

9 時に約束したので、5 分前には車寄せのところに立った。クンチャイが来ない。暑いので、ロビーと行ったり来たりしながら待った。クンチャイは来ない。

まんたんは、心配になった。ジムの話だと、突然失踪する運転手さんもいるという。せっかくよさそうな人に当ったのに、失踪したんだろうか。

クンチャイ、走る
実際には走って来ません

まんたんとぷんぷんの態度、挙措に好ましからざるものがあって、来るのがいやになったんじゃないだろうか。

来る途中に事故にあったんだろうか。急に病気になったんだろうか。

それとも家族に異変が。

あんまり心配したので、クンチャイが姿を現したときにはうれしくて、「クンチャーイ、サワディーカー」と叫んでしまった。

クンチャイも「ボース、マダムー」とにこにこしていた。が、とても幸福な 3 人は実はとても間違っていたのである。待つことはこの国では何にでも付いてまわった。いらないオマケのように付いてき

た。オマケの特色はとても苦しいことだった。

言わなくてはいけないのは、待たせる方は苦しめるつもりはないことだ。苦しむのは苦しむ側の不可思議な特色なのであった。

レディースクラブ篇の「ラヨンでの生活」を手にご機嫌な 3 人はラヨンマーケットに出発した。

タイ 18　レディースクラブは正しい

日本で、「ラヨンでの生活」を読んだとき、まんたんが安心したことは納得してもらえると思う。マーケットがあるといったら、もう路頭に迷わずに済む。誰でもそう思うと思う。

ラヨン市内、メイン通り、ピンクの歩道橋
なぜピンク？市長が好きな色

ただし、そのマーケットが日本のスーパーマーケットを言う場合である。ラヨンマーケットに行ければ生活に不安はないと、頼みにするところ大であった。

ラヨン市は、バンコックに続くスクムビットロードという大きな四車線の道路を中心に理解される。誰にか。まんたんに、である。

クンチャイ走る、シビック走る
あー、浪漫飛行

イタリアの工事会社が作ったという道路は、実にしっかりした見事な道路で、カンボジアに向かって右手が海、左手が陸地。通りに沿って集落があり、海側の方に大工業地帯が建設中であった。

ラヨンマーケットは一番の繁華街にあるようであった。クンチャイもすぐにわかった。

車の中でかけてもらったテープの中で、「浪漫飛行」という不思議な歌をクンチャイが好きだと言うので、ガンガン鳴らしながらスクムビットロードを飛ばした。

人と車でごったがえしているところで、クンチャイが「車を停めて来るのでここで待て」という。降りたところは、屋台の食べ物屋さんがたくさんあり、その奥の方が露天市のようで、暗くてよく見えなかったが、無数の物売りのコーナーがひしめいているらしかった。

ラヨンマーケット！！
まだ、きれいな方

子供はおしっこをしているし、声高な売り買いの交渉が聞こえるし、ひどい臭いがするし、まんたんはそこに立っているだけで怖かった。

ずいぶん待って、クンチャイが来た時は救いの神が出現したような気がした。「クンチャイ、ラヨンマーケット！」と言うと、クンチャイは、「ラヨンマーケット！」とにこにこしながら答えるのであった。

「クンチャイ、ラヨンマーケット！」「ラヨンマーケット！」その繰り返しである。

ラヨンマーケット入口どこ？
そう、わからない

レディースクラブ会報
入会秘話は後ほど

そう、その壮大な露天市がラヨン最大のマーケット、ラヨンマーケットであった。

まんたんとぷんぷんは絶句した。足を踏み入れることができなかった。踏み入れたとしても、買い物をすることはできなかったと思う。

立っただけで車に戻り、まんたんは萎れてしまった。ここでやっていけるんだろうかと心配になった。

ぷんぷんが「ま、無理だな。だいじょうぶだよ。食事は全部ホテルですればいい」と言った。まんたんは答える言葉もなかった。ぷんぷんは「ま、レディースクラブは間違ってない」とも言った。

いいや、レディースクラブは正しかったのである。まんたんはこのマーケットで、平気で野菜や魚を買い、ラヨンで一番楽しいところだと思うようになった。すぐに。

？日後のラヨンマーケット
まんたん、ひとりで歩けます

タイ 19　坂本マーケット

クンチャイは、頭のいいやさしい人でした。

ラヨンマーケットで意気消沈したまんたんの気配を察して、「坂本マーケットに行こう」と自分から誘ってくれました。坂本というから、もしかしたら日本人経営のスーパーかもしれないと、連れてってもらうことにした。

坂本マーケット入口
１年後の写真
ほんとの店名は何なんだろう？

2 階建ての少し清潔なお店で、1 階が食料品日用品、2 階がおもちゃや文房具衣類と素朴な何でも屋さんだった。残念ながら生鮮食料品は望めなかった。

それでも、まんたんはうれしかった。最悪ここだけでもどうにかやっていこう。トイレットペーパーも洗剤も米もある。リポビタン D もあった。リポビタンとミネラルウォーターとティッシュペーパーを買った。椰子の実トイレのガソリンスタンド以来、初めての買い物だったので、なんとなく楽しかった。

そうだ、ご飯はぷんぷんの言うとおり、ホテルに食べに行けばいいや。飢え死にすることはないや。

どうにかなるわ。まんたんは居直った。

腑に落ちないのは、なぜ、ここが坂本マーケットなのかである。クンチャイに聞くと、カセットテープを置いてあるところにつれって、「サカモト」と言う。

坂本龍一さんのカセットだった。

坂本マーケットの名付け親の
CD ジャケット（日本版）

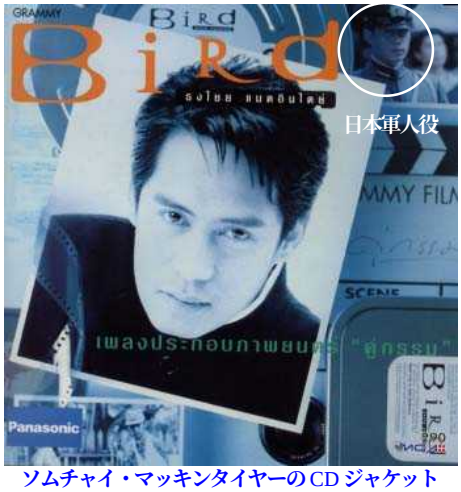
坂本マーケットではリポビタンと坂本龍一さんの他に、「日本」がもう一つあった。日本の着物を着た男の人のポスターだった。よく見ると、えらくハンサムで、日本人とは思えない顔だった。おまけに、着物の打ち合わせが右が上になっていて変である。

クンチャイに聞くと、ソムチャイ・マッキンタイヤーというタイ一の人気歌手で、俳優の主演するテレビ番組のポスターであった。タイの女性と恋におちた日本の軍人が、恋人がみごもっているのを知らず戦場に散るというドラマだった。

タイの女の人に大人気で、みな涙するという。

こういうとき、ヒヤッとする感じ、お察し下さい。つくづく対日感情の良い国でよかったと思った。国が国なら、涙するどころか、放送禁止である。

ホテルに帰って、まんたんはもう一つ、ヒヤッとした。まんたんは、コーチの肩下げかばんを愛用していて、今も東京に行く時はこれである。赤坂バルバラに行くときもこれである。黒と茶の二つ持っていて、ぷんぷんも持てるし、頑丈だし、使い勝手がいいのである。タイに行くとき、茶の方を新調して下げていった。



ソムチャイ・マッキンタイヤーの CD ジャケット

その日はまだ 4 日目だった。なんか、かばんが変。じっと見ると、茶の色が黒っぽい飴色に変色していたのである。あまり気にしなかったけれど、タイの湿気と高温と陽射しは、皮かばんの色を変えるほどきついものだった。

タイ 20　トゥモロ

疲れて帰ったら、日本人なら熱いお風呂につかってと考える、と思う。

PMY ホテルの部屋に入ったとたんに、蛍光灯が切れた。フロントに電話して、人をよこしてもらう。ここで、その人が蛍光灯と脚立を持参して取替えてくれると思ってはいけない。「オーオオ」（あぁ、そうなの、わかった）と言って、その人は帰ってしまう。

再びフロントに電話して、人をよこしてもらう。別の人が来てくれる。「オーオオ」と言ってその人も帰る。またフロントに電話して、人をよこしてもらう。この人あたりで、ようやく蛍光灯が替わる。

やれやれと、浴槽にお湯をためる。水が茶色ににごって底が見えない。ま、ドロ水に近い。フロントに電話して、人をよこしてもらう。蛍光灯とほぼ同じ「オーオオ」の手順を踏む。

けれど、浴槽にたまった水を見て、何とかしてくれるはずの人が、不思議な顔をしている。

「ナーム（水）を見て」と言うと、見てくれるんだが、それはやさしく微笑みながら「ナーム」と手でお湯をすくって、なにが問題かわからないというふうである。このお湯には入れないと、ミネラルウォーターと比べて見せて、わかってもらおうとしてもダメである。

まんたんとぷんぷんも困ったが、その人も困った。最終的返答は「トゥモロ」であった。

明日。明日どうにかしてくれるんだ。今日だけなんとかすれば明日はきれいな水が出る。何度もお湯を溜めかえて、なんとか底が見えるくらいで体を洗った。

しかし、翌日、水をどうにかしてくれるなんてことはなかった。明日というのは、今でない果てしない未来のいつかに改善されることがある可能性もなきにしもあらずということで、要するにどうにもならないということなのであった。

「トゥモロ」を数え切れないほど聞くことになるが、最初は明日だと信じて疑わなかったのである。

まんたんはチップを値下げすることにした。そうしないと破産するような気がした。

タイ 20 バーツ、当時 70〜80 円くらい
チップは 10 バーツ、朝飯は食える

第 4 部　家庭訪問

タイ 21　家庭訪問

お休み 2 日目は、クンチャイに頼んで、どこでもいいから、車で回ってくれるように頼んだ。

会社から住まいに移れるという連絡が来るまで PMY ホテルなので、食料も買う必要がないし、ドライブをして、ラヨンの名所を見て見聞を広め、街の様子を知りたいという、前向きな姿勢であった。

が、1 日家庭訪問になった。誰のかというと、クンチャイのである。

叔父さん、義理のお母さん、お姉さん、クンチャイの家、クンチャイが通うために間借りしてる伯父さんの家、奥さんのやってるレストランなどを訪問して、クンチャイについての見聞を広げることができた。

まんたんは、スクムビットロードを基点に右か左かしかわかんないので、定かでないのだけれど、クンチャイの親戚はラヨン中に散らばっているようだった。

ラヨン観光？まだ観光気分
まだ知らない家庭訪問

あぁ、ごめんね、この一話でこの話題は済まそうと思ったのだけど、だめだ。それぞれ、別々にしないと語りきれない。

タイ 22　あなたは水をことわれるか

家庭訪問の最初は、叔父さんの家だった。

スクムビットロードからでこぼこ道を左に入ったところにあるコンクリート壁のトタン葺きの家だった。回りに人家はなかった。叔父さんはマーケットに仕入れに行って、仕入れたものを近辺で売る仕事をしていた。

その日は叔父さんは家にいて、息子さんもいた。叔父さんはクンチャイを見ると大喜びして、ワイをしながら家に招いてくれた。家の中は暗かったけれど、お台所のところには蛍光灯がついていたしきちんと整えられていた。

いいなぁと思ったのは、石の床のひんやりと気持ちいいことであった。そう、靴は家にはいるとき脱いで靴下だった。つるつるに磨かれた石床は靴下越しにも、ほんとに気持ちいいのである。

何をしたかというと、四角いテーブルに叔父さんと息子さんと向かい合って座り、ご挨拶をしたのである。こういう場合、タイではどうするものかわからなかったので、あの手を使うことにした。日本と同じことをすればいい、あれである。

一礼。
「サワディーカー、日本からきました」

一礼。
「マプタプットの会社で働きます」
「クンチャイが運転手さんをしてくれることになりました」
「とても涼しいけっこうなお宅ですね」

通訳はクンチャイ。しかしまんたんとぷんぷんの挨拶の 30 倍の長さくらいしゃべっていた。逐語訳ではなく、紹介と感想と空想が入り混じった独創的な訳だったと思われる。

叔父さんと息子さんはオーオオ、オーオオと合いの手を入れてくれるのであった。クンチャイは得意になって、ますます通訳に独自の説明を付け加えるようであった。

ご挨拶が済むと、おもむろに息子さんがコップに水を入れて出してくれた。まんたんは、ドキンとした。熱帯に行ったことのある人は想像がつくと思うのだけれど、この水は飲んではいけない水だった。

一人まだ日本人
クンチャイと叔父さん家族
今、見ると皆似ている

冷や汗が流れた。親切な人々が、好意で自分たちのために差し出してくれたもてなしの水を拒否できるか？

でも、この水を飲めば危険だ。まんたんとぷんぷんを 3 人が見つめている。

と、そのとき、ぷんぷんがコップを手にした。まんたんは心の中で、飲むな、飲むなと祈った。が、ゴクリと音を立てて、ぷんぷんは飲んだ。

肝炎のウィルスがぷんぷんのおなかに入っていくような気がした。まんたんは、やけくそでひとくち、口に含んだ。

見ていた 3 人はほっとしたように、話を再開した。聞けば、叔父さんは奥さんを亡くされたばかりだそうだ。叔母さんの写真が飾ってあった。さて、また、日本ならどうするかである。

新しい仏さまのいる喪のお宅にお邪魔したら、仏壇に参らせていただくのが普通だと思った。まんたんとぷんぷんは、写真に手を合わせた。叔母さんのご冥福と肝炎にならないことを祈った。

水は飲まないのが正解である。しかし、あのときあの場で、あの水をことわれたか。今でも他の人はどうだろうと考える。聞いてみたいと思う。

タイ 23　お父さんは中国人

義理のお母さんは、ラヨンマーケットに近い街中に住んでいた。2 階か 3 階建てのお家がぎっしり並

んでいる通りだった。

お母さんの家は、間口の広い大きな家で、1 階はお店のような一間になっていて、お母さんは、通りに椅子を出して、のんびり座って外を眺めていた。やはり、クンチャイを見ると大喜びで、また、まんたんとぷんぷんを歓迎してくれるのであった。近所の子供たちや、知り合いの人が続々と集まってきて、ワイをしてくれるのであった。

ここでも、日本流ご挨拶をした。クンチャイは見物人が大勢なのでいよいよ発奮して、通訳を勤めたが、独壇場であった。みんな、オーオオとクンチャイの話に耳を傾けるのであった。

まんたんは、胸をなでおろした。クンチャイのお父さんとお母さんは亡くなっていて、このお母さんは義理のお母さんだと聞いていたので、クンチャイと仲が良くて安心した。

突然、クンチャイが「お父さんは中国人だ」と言った。それは実に誇り高い宣言のようであった。

えっ、中国人？

驚くまんたんの手を引いてお母さんが、奥の壁に掲げられた写真の前に連れて行った。50 人くらいの集合写真だった。お母さんが指さす人を見て、一目でクンチャイのお父さんだとわかった。らっきょう型の顔をしたクンチャイとそっくりな人だった。漢字で書かれた添え書きを見ると、潮州というところから、集団でタイにやって来た人たちらしかった。

クンチャイにそう言うと、クンチャイは「マダムは中国の文字がわかる」と、幸せそうな顔をした。

お母さんは、誰かに頼んだようで、コーラを 2 本ストローつきで出てきた。大きな瓶だったので、飲みきれそうもない。

「1 本を 2 人で飲むので、1 本はお母さんに飲んでもらってほしい。」
「クンチャイのお母さんの前で 2 人だけ飲み物を飲んだら、クンチャイのお母さんに悪い」
と言うと、クンチャイは見物人に通訳してくれた。

このときの「オーオオ」はひときわトーンが高く、年長者を敬う日本人が感銘を与えたのではないかと、まんたんはひとり悦に入っていた。

しかし、ぷんぷんは、かなり奇妙な図柄だと笑うのだった。道路に面して並んだタイ人のおばあさんと、2 人の日本人が大勢の人を前にコーラを飲んで見せた、不思議な図柄だと。

タイ 24　パイナップルとバナナ

草むらの中の細い道をいくと、突然視界が開けて、そこは果樹園だった。

何軒かかたまってお家があって、周囲はバナナとパイナップル畑だった。まんたんはバナナとパイナップルが実っているのを見るのが初めてだったので、大喜びした。

「ぷんぷん、パイナップルだぁ！」
「クンチャイ、パイナップル！」

うれしくてうれしくてパイナップル畑を走り回った。

赤い土の畑には、縦横きちんと間隔をとって、パイナップルの株がある。パイナップルの頭に生えている葉っぱを大きくして枚数を増やしたようなのが株である。その葉っぱの中心にテニスボールくらいの大きさのパイナップルの赤ちゃんが成長中なのであった。そのかわいいこと、しっかりパイナップル柄なこと、あはははは、あはははと笑った。

ぷんぷんも笑った。クンチャイも笑った。集まってきた女の人たちも大声で笑った。女の人たちはみんなクンチャイのお姉さんだった。子供たちも笑った。

バナナは大きな柔らかな緑色の葉を風に揺らして、グローブのような若い実を護っていた。「バナナ見るのも初めて」と言うと、ぷんぷんは熱川温泉熱帯植物園で見たことがあると笑うのだった。

まんたんは、後にパイナップルとバナナを買った時に、値段が 1 個 4 円、1 房 40 円とかであるのを知って、蒼ざめた。

クンチャイのお姉さんたちは、生活するためにどれほど多くのパイナップルとバナナを摘まねばならないだろうかと思うと安いのを喜べなかったのだ。

タイ 25　国際派のクンチャイ

クンチャイはなぜ英語を話せるか、疑問の向きもあると思う。

クンチャイは国際派だったのだ。中東の国に働きに行って、大変な苦労をしたという。広大な椰子林のついた豪邸と英語が、クンチャイの艱難辛苦の結実だった。

その国はアメリカといい関係ではなかったから、どうして英語かと不思議でならなかった。少し変だったが、英語がとても上手だった。

信じられないのだが、アメリカ側に組していたはずのフランスの人が、その国で道路を作っていて、クンチャイは、フィリピン、パキスタンの人と一緒にその工事に従事し、中東とフランスとフィリピンとパキスタンが嫌いになってタイに帰ってきた。

クンチャイの家族と奥さんの親族
真ん中が No.1 奥さん
No.1 の意味？後でわかります

2 階建てのお家は、コンクリートでできていて、窓には鉄の格子がはまった立派ななお家だった。奥さんは色白の美人で、女の子と男の子がいて、風通しのいい居間でコーラをごちそうになった。お姉さんの果樹園でも、コーラをごちそうになったから、おなかがいっぱいになった。クンチャイは意気軒昂で通訳をつとめるのだが、自分の家では主として、威厳をもって家族に接していたの

が微笑ましかった。

このときもどこからともなく人が集まり、まんたんとぷんぷんは、王様とお会いすることになった。

お皿にのった王様。
果物の王様、ドリアン！

正直に白状すると、王様はウンチの香りだった。叔父さんのところのお水と同じで、差し出される温かいもてなしを粗末にできようか、たとえ、それがウンチであったとしても。

2 人で食べた。

ドリアン！！
ラヨンは果物の宝庫です

タイ 26　漁師の伯父さん

クンチャイは運転手さんになるにあたって、海辺の伯父さんの家に間借りしていた。

海のすぐ近くで、平屋の大きな家で 6 人の女の人たちが広い土間でお魚をさばいて料理をしていた。ひとしきり挨拶がすむと、ランプータンを勧めてくれたのでもらって帰ることにした。

クンチャイの部屋は、伯父さんの家に無理矢理トタンで建て増しされていて、ベッドがあるだけの簡単なものだった。まんたんは雨が降ると、クンチャイのお部屋が雨漏りしないか心配した。

不思議だったのは、あの椰子林の立派な家があるのに、どうしてここに住んでいるのかなぁということだった。いろいろ事情があるんだろうけど、運転手さんをするために妻子と離れて暮らすのかと思うと気の毒で申し訳なかった。

ラヨンの海、きれい
ラヨンは魚介類の宝庫です。

ふん、気の毒ではなかったのだ。おまけに気の毒ではないことに、ぷんぷんが先に気がついたのが、勘のいいことでならすまんたんにはおもしろくなかった。顛末は家庭訪問の最終話に譲る。

クンチャイの伯父さんは海に出ていて会えなかった。一度も会えなかった。海に落ちて亡くなってしまったのだ。まんたんはお葬式に伺ったが、どんな人か会いたかったと思った。

タイ 27　クンチャイの家族構成

あんまりたくさんクンチャイの家族と会ったので、まんたんもぷんぷんも頭がごちゃごちゃになった。

いやにお姉さんが多いなぁ。
どうして椰子林の豪邸から通わないんだろ。

など、疑問はあったが、言葉の問題、クンチャイも興奮しているのかも知れないと考えた。

奥さんがやっているレストランは、伯父さんのお家のすぐ近く、学校とお寺の前の木立の中にあった。風が気持ちのいいところで、今でもあの風を覚えている。船着場も道むこうで、けっこう繁盛していた。

レストランは大きな木の下に、どういう技術なのか、宙に浮かせたトタンを屋根に調理場、テーブル 2 つ、他のテーブルは戸外にあるというオープンなレストランだった。燃料はプロパンガスで、おめでたの女の人が野菜炒めを作っていていい匂いがした。

オープンレストラン with トタン板
女性は？

クンチャイは女の人を間違えて、奥さんと言った。

「やだ、クンチャイったら、もう、混乱して奥さんもお姉さんもわかんなくなっている」と、まんたんは笑った。

クンチャイのお姉さんは、またしてもコーラをごちそうしてくれた。めずらしくおとなしい静かな感じの人で、まんたんは好きになった。8 月に赤ちゃんが生まれるというので、生まれたら会わせてと頼んだ。

家庭訪問はすんだ。なんで、こんなことになったんかなぁと思ったが、タイになじむのには素晴らしい経験だった、疲れたけれども。

エクスパッツは運転手さんの家庭訪問などすることはふつうないということを後で知った。クンチャイが運転手さんをした経験がなかったことも、この家庭訪問が実行された理由だったと思う。

何ヶ月後にはこうなったんです。

帰りの車の中で、ぷんぷんが「まんたん、気がついた？」と言う。
「何を？」
「だから、クンチャイの家族構成」
「あんまりいっぱいで、よくわかんなかった」
「気付いてないんだ？」
「だから、何が？」
「奥さんが 2 人いる」
「うそ！モスリムじゃないのよ」
「聞いてごらん」

まんたんは、クンチャイに失礼にあたるのではないか、気にしながらおそるおそる尋ねた。

クンチャイはデヘデヘてれながら、「ノープロプレン(No Problem)。ナンバー1 は知らないし、ナンバー2 はいい女の人である」

まんたんは、頭が痛くなった。ナンバー1 には、日本人の運転手をするのでホテルの駐車場で寝てい

ることになっていて、ナンバー2 には赤ちゃんが生まれるのであった。

あぁ！

第５部　可憐なまんたん

タイ 28　海水浴

PMY ホテルの前の海
んー、絶景、で、パラソルなし

お休みの 3 日目、まんたんとぷんぷんはプールで遊んだ。新婚旅行以来、初めてお互いの水着姿を見て、おデブだと言って笑った。

「ほれ、雌鹿のような足！」とまんたんが美しい足を伸ばしても、一緒に泳いでいるアメリカ人の奥さんの足の長さの半分くらいしかないのであった。

熱帯の田舎の海は蒼くて、ホテルの前の道路は反対側がすぐ海だった。裸足で海まで行ったけれど、無謀な行為だった。木陰もパラソルもない海岸は砂浜が熱くて歩けないのであった。サンダルをはいても裸足ではやけどするくらいなのである。観光地の海岸の派手なビーチパラソルや椰子の木はだてではなかった。

まんたん with サングラス
パタヤ近くのジョミテンの海
高級リゾート、パラソルあり！

タイにいる間、足だけペチャペチャと波打ち際を歩いたことはあったけれど、一度も海に浸かったことはなかった。下水のこともあった。処理施設はあるのだろうけれど、どうも海っぱたの施設や人家の下水は大海原に散っていくような気がしてならなかったのだ。

海の好きな友だちは「なんてもったいないことすんの？信じらんない」と言った。でもね、ずっと海っぱたにいると、あまりもったいなくならなくなるんだ。

タイ 29　可憐なまんたん

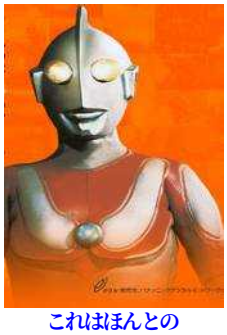
建設中！　暗雲立ち込める？

ぷんぷんが会社だと思うと、まんたんは心細くなった。

ぷんぷんは新しい装置をつくるとき、忙しくなる。家に帰って来ても、お勉強があって、寝る時間を削る。今回は 3 度目の新しい装置で、工場全部の新設だった。「はっきり言ってかまえない。すべてまかせる」と、言い渡されていた。

それは日本でも同じことだったけれど、心細いなんて初めての経験だった。まんたんは、ウルトラマンちゃんと呼ばれる元気者だったのだ。

当面の課題は、主たる任務の飯炊きと引越し。ホテルで食事をするとしても、できたら自分で作って


これはほんとの
ウルトラマン

あげたいなぁと思った。引越しは 1 人でやらなければならないので、いつ会社から連絡があってもただちに住まいに移り、荷物を納めるようにできるようにしなければいけないと思った。

ぷんぷんも心配だったのであろう。クンチャイに運転手さんの業務の他に、まんたんのお付き、身辺警護も頼んだ。クンチャイは親切なので喜んで引き受けてくれた。所得増になったと喜んでくれた。

可憐なまんたんはどれでしょう

そうである。なにせ、ナンバー1 とナンバー2 がいるのである。

まんたんは、自分が可憐な女の人になったようで、きっと顔も可憐になったに違いないと思った。そんなことは気の迷いであった。

タイ 30　出社

着任はしたが、すぐお休みだったので、出社の朝は、身支度を整え、ホテルの車寄せまで見送りに行った。お化粧をして朝「いってらっしゃーい」するなんて我ながら、けなげなことであった。

クンチャイは来ない。今まではよかったけれど、決まった時間に来てくれないと会社に遅れてしまう。

そう、まんたんとぷんぷんは最初に間違いを犯していたのだ。ちゃんとクンチャイに話さなくてはいけなかったのだ。6 時 20 分は 6 時 40 分ではないことを。

クンチャイも間違っていたのだ。ボースが時間を指定したら、その前に着いていなくてはならなくて、そうでないとボースが困るのであった。はじめに双方とも、間違ったのだ。

もうひとつ、まんたんが見送りに行ったのも間違いであった。

戻ってきたクンチャイとラヨンの探検に行こうとしたまんたんは、知らない運転手さんにワイをされてなんか言われた。

クンチャイはその運転手さんとしゃべりはじめた。他の運転手さんも集まってオーオオやっている。

何かまずかったに違いない。クンチャイを呼んで聞くと、意外な答えであった。

知らない運転手さんは、まんたんがぷんぷんの見送りをしたので、「夫を大事にしていいマダームだ」とわざわざ言いに来てくれたのだった。

これは住まいのコンドミニアムの入出口の前
1 年後にはいつもちゃんと
待っているようになりました。

クンチャイは、「日本人の女の人は良いのでそうなのだ。ボ

ースは大人物なのでマダームがそうするのだ」と説明してくれたという。

そんなことはない。おおいなる間違いである。

まんたんはまたも頭が痛くなった。

これでは毎日見送りしなくちゃなんないじゃないか。実際、タイにいる間、ずっとそうした。そうしないと、クンチャイはじめ運転手さんたちが、「日本人のマダームは病気じゃないか」と心配するのであった。

と、ひとつ思ったのは、欧米系のマダームにこんなことを言うかなということだった。同じアジア人なので親しみ易さを感じてくれているところがあるような気がした。

タイ 31　ぷんぷんも頭を抱える

ラヨン探検は成果があった。

街を車で回っているうち、何とか買い物のできそうな坂本マーケットクラスのお店を何軒かみつけた。P マーケット、ボブマーケット、あまりきれいではなくてほこりだらけの倉庫のようなところから、品物を掘り出すのだが、まんたんはうれしかった。生鮮食品はなかったがうれしかった。

「ラヨンでの生活」に書いてあった病院、バンムングラ病院も見つけた。PMY ホテルに程近い立派な病院だった。

バンムグラ病院(Bumgrad Hospital)
の受診カード、立派でしょう！

ぷんぷんが帰ってきたら、報告しようと待っていたが、帰宅したぷんぷんは頭を抱えていた。

日本なら、庶務の人が、文房具とか一式揃えて待っていてくれるのだが、机にはパソコンがあるだけで、全部 1 人でやらなくてはならなかったこと。

それから、とんでもない会社に来たかも知れないと言うのだった。

ぷんぷんの会社机
これは会社最後の日です

カナダ人のキャメロンというぷんぷんのところの部長さんのような人が、タイのスタッフを集めてお話をしたと言う。耳を疑ったそうだ。

「会社には定刻に出社しなければならない」
「遅れてはいけない」
「休むときは連絡しなければならない」

まんたんは何も変に思わなかった。当たり前のことだと思った。

ところが、タイ人のスタッフから強硬な非難意見が出るんだという。

「遅れることもあるではないか」
「連絡できないこともあるではないか」

まんたんもアングリした。

アジアの人だから近いというのは間違いである。日本人ははるかに欧米人に近い、そう思った。

J・キャメロン・マクマスター
なぜか、ミドルネームが通称

第 6 部　引越し

タイ 32　赤むけのおてて

すぐにも住まいに移れて、落ち着けると思っていたのは、間違いだった。結局、PMY ホテルに 2 週間もいることになった。

スーツケースには 1 週間は間に合う衣類を詰めていったが、とにかく汗をかくので、下着の替えがなくなるのである。シャワーを浴びて、汗まみれの下着を着るのは気持ちの悪いものである。

ホテルの費用はぜーんぶジムが払ってくれるというので、クリーニングサービスをせっせと利用したけれど、パンツや下着のシャツをクリーニングに出すのは抵抗があるのだった。

ホテルでのんびりなんて聞いたら、まんたんだって「いいわねぇ」と言うと思う。でも、実際には P マーケットで買ってきた、洗濯洗剤で洗濯ばっかししていた。

外国住まいで手洗いをしたという紀行を読んだときがある。まんたんは心から同情した。あれは大変なのだ。

洗面所に洗剤溶液を作り、そこで洗って、お湯をためた浴槽で濯ぐ。これをやると、水、洗剤のせいもあるのだろうけど、手が赤むけになった。

ホテルでなく、コンドミニアムに
引越してからの手もみ洗濯の証拠！

「おじいさんは山で柴刈り、おばあさんは川で洗濯をしていました」という昔話の文句がいつも頭に浮かんで、桃太郎のおばあさんだって洗濯をしていたのだ、と自分を慰めた。

奇妙な慰め方であった。

タイ 33　引越し

会社からそう遠くないパユーンに、ガーデン・コンドミニアムがあった。

予定とは違うところだったが、そちらがあまりにひどくて苦情が殺到したので、変更になったという。要望があれば、金ゴリラが何とかしてくれるということだった。

海際のマンションのようなもので、守衛さんに警備されていて、ガーデンというだけあって、椰子の木やいい香りのする花をつけた木々に囲まれたすばらしいコンドミニアム

コンドミニアムから見る昼の海
あー、絶景、1 ケ月は

Payoon Garden Condominium
日本だったら高級マンション

だった。

もちろん、プールつき、プライベートビーチつきだった。テニスコートも、トレーニングルームもあった。

ホテル形式になっているので、お掃除も頼めるし、クリーニングも頼めるし、レストランもあった。

15 階の部屋はベランダに出ると、浜辺が遠望でき、部屋の中にいると、海に漕ぎ出した船にいるようで感動した。

何より感動したのは広さで、2 つのベッドルームにそれぞれついているバスルーム１つだけで、日本の住まいの広さぐらいあった。

コンドミニアムから見る夕の海
あー、さらに絶景、1 ケ月は

ぷんぷんとまんたんはとても幸せになった。が、それは間違いだった。何度このコンドミニアムを呪ったことだろう。今思うと、食卓テーブルに蝋燭の蝋が固まっているあたりで気がつくべきだったのだ。

タイ 34　金ゴリラ再び

着任のとき会った金ゴリラがコンドミニアムに来てくれた。また、ひしと抱きしめてくれるんだが、まんたんは前回のことがあるので、息をとめて窒息しそうになった。

コンドミニアムのリビングルーム
こんなに立派なのにどうして洗濯機がないの

まんたんは、契約書にあるとおり、洗濯機と電子レンジとミニ冷蔵庫ではなくて冷凍庫の付いた冷蔵庫が欲しいと金ゴリラに言った。

まんたんは必死だった。が、金ゴリラはここでは洗濯は全部頼めると言う。食事はレストランでしたらどうかと言う。「パタヤのホテルと同じくらいここは高いのよ」とも言った。

コンドミニアムのゲスト用ベッドルーム

とんでもない、1 階のレストランでは黒い猫が走り回っていた。あぁ、それがほんとに猫だったらどんなによかったろう。猫ではなくて、太りに太ったネズミだったのだ。

金ゴリラは役に立たなかった。

結局、ジムとぷんぷんの交渉で、洗濯機と電子レンジと冷凍庫の付いた冷蔵庫が来るまで、また待った。その間、また洗濯だった。

タイ 35　ご近所　～逆もまた真なり～

コンドミニアムの部屋入口側
向こう三軒両隣といわれても

引越しをしたら、向こう三軒両隣には挨拶する。

まんたんは、鳩居堂で買ったカードを準備していったので、それを持ってご挨拶におもむいた。海に面して 1 列なので向こう三軒はない。両隣と上下のお宅に行ったのだ。

右隣はオーストラリアからきた一家で、ご夫婦に男の子の 3 人家族だった。ケリーはやさしい奥さんで、「困ったことがあったら、いつでも来てね」と親切だった。

左隣は空き家だった。

下の家はアメリカ人のうちだったが、ガムを噛んでいる暗いタイの娘さんが出てきて、メイドさんかと思った。

上の階は留守だったので、管理人のクンコンに聞くとバンコクに住んでいるタイのリッチな人の部屋で、週末にしか来ないと言う。

コンドミアムの管理人、クンコン
どうも・・・・

クンチャイに下の部屋にメイドさんがいたと言ったら、その人はアメリカ人のナンバー2 なのだという。まんたんはちょっと驚いた。クンチャイはものすごいおしゃべりで、誰とでも話して情報を集めるのだった。

逆もまた真なり。我が家のものすごい情報がクンチャイを通して流出しているに違いなかった。

タイ 36　輸送事情

炊飯器もある、変圧器もある
ミシンもあった？

日本から送った荷物は、ほぼ全部着いた。

シアトルで、送ったすべての荷物が紛失するという悲惨な目にあった人がいたので、安心した。持ち込んではいけないはずの薬品も食料も没収されていなかった。心配した、変圧器や電気釜、CD プレイヤー、ミシンも無事だった。

へんなものがなくなっていた。文房具の箱のマーカーとか、塗り箸とか、まんたんがずっと集めていた料理のレシピのファイルがなかった。

これ以来、まんたんはパンを焼くのも、ケーキを作るのもやめちゃったのである。これは幸運なことだったらしいが、ほんとうだった。

保険会社に申請するような損害はなかった。

タイ 37　スターマーケット　～カブト蟹～

最初からクンチャイにここに連れてきてもらえばよかったと思った。コンドミニアムから 20 分ぐらいのところに、4 階建てのスターマーケットがあった。

まんたんとぷんぷんは「イトーヨーカ堂だ」と大喜びした。日本のスーパーと同じようなお店がちゃんとあったのだ。生鮮食品もちゃんと冷蔵棚にあったし、日常生活に必要なものはすべて揃っていた。充填豆腐があったのには歓声をあげた。

レジだって日本のスーパーと同じだった。初めてラヨンで生活できると確信した輝かしい瞬間だった。

お魚コーナーには海老だってあったし、生簀だってあった。ただ、その生簀には日本では天然記念物のカブト蟹が重なっていて、まんたんとぷんぷんは絶句したのだった。

タイ 38　初めての飯炊き

あんなに哀しいことはなかった。

まんたんは張り切って料理をした。日本から送った貴重な醤油と味噌とお酢を使って、厚焼き卵、きゅうりの酢の物、茄子の味噌炒め、豆腐の味噌汁を作った。

機内食以来、はじめての和食だった。いいかげん PMY ホテルのタイ料理に飽きていたので、ぷんぷんもそりゃあ喜んだ。

「いただきまーす」と食べ初めて、二人は無言で箸を置いてしまった。食べられるシロモノではなかったのだ。

豆腐は味が変わっていた。
きゅうりは未熟メロンだった。
茄子はおならのような味だった。
一番まともな卵焼きも、グラニュー糖（お砂糖はそれだけしか売ってなかったのだ）のせいか変だった。

タイ日本食を食べながら見えた景色
景色でメシが食えないのを自覚した日

ご飯は戻しそうだった。

ぷんぷんはミネラルウォーターを使ったせいではないかと言った。それは当ってたんだが、まんたんは哀しくて、哀しくて仕方なかった。

あんまり哀しかったので、超貴重品の日本のインスタントラーメンを食べてしまった。

第７部　ドライビングレッスン

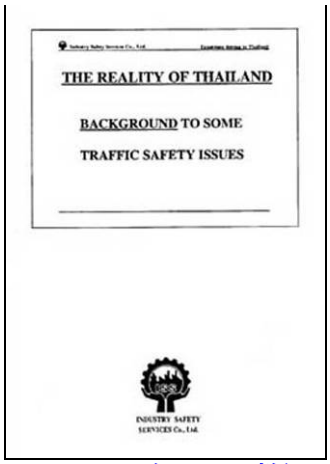
タイ 39　ドライビングレッスン

会社でタイでの車の運転についての講習会があるというので、まんたんはぷんぷんと一緒に会社に行った。

日本でぷんぷんの会社に足を踏み入れたことは一度もなかった。会社のことはいまだにわからない。

初めてぷんぷんのお部屋と机を見た。まだ、誰も出勤していなかった。

会場の会議室にも誰もいないと思ったら、オランダ人の先生がいたので、まんたんは、英語がわからないので、大事なところはゆっくり話してくれとお願いした。この講習はとても大事だと思っていたのだ。



ドライビングレッスンの表紙

真ん中が三人乗り
これはまだまだ

クンチャイに乗せてもらっているうちに、ラヨンは車の運転がとても難しいところだと知った。

いたるところで事故死した犬の死骸を見るし、同じくらい事故と事故で怪我した人を見るし、乗用車、バイク、ピックアップという軽トラック、バーツバスというトラック改造の乗合バス、三輪自動車のトゥクトゥク、サムローという自転車タクシー、歩行者が無秩序に入り乱れて、奇跡のようにそれぞれの目的の方向に移動するのである。

定員というものがないらしく、1 台のバイクに 5 人も乗っていたりする。バイクはよく小学生の子供が運転していたりした。

まんたんは、ぷんぷんと一緒の部署のデビットソンという人とぷんぷんの間に座った。先生は、ゆっくり大きな声で話すときに、あきらかにまんたんの顔を見て、わかった？という顔をした。

まんたんはうなずいて、「信じられない」とつぶやく。すると隣の首の短いデビットソン、略して首デビもおごそかにうなずいて、まんたんに同意するのであった。

バーツバスへの駆け込み乗車

記憶に残っているのは以下のようなお話だ。

・ラヨンには信号が１つしかない。
（そういえば１つしか見てない）

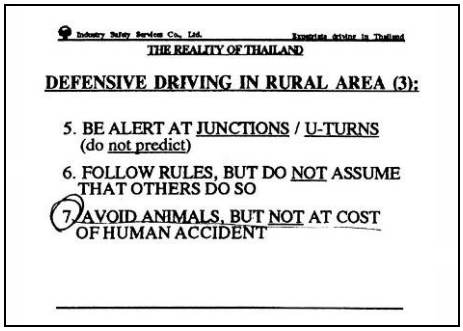
・信号がないのでどこでも U ターンする。

（あの猛スピードでそんな）

・犬、牛、象をよけようとして事故を起こすことが多い。
　ラヨンでは動物が車について学習途中である。
（学習するのか）

・以上の交通ルールが守られることは少ない。
（それでいいのか）

・警察官に呼び止められたら、100 バーツ渡すこと。
（反則キップは？）


Industry Safety Services Co., Ltd. Expatriate driving in Thailand

THE REALITY OF THAILAND

DEFENSIVE DRIVING IN RURAL AREA (3):

5. BE ALERT AT JUNCTIONS / U-TURNS (do not predict)
6. FOLLOW RULES, BUT DO NOT ASSUME THAT OTHERS DO SO
7. AVOID ANIMALS, BUT NOT AT COST OF HUMAN ACCIDENT

どっちもどっちなんだけど

何人乗り？7 人、8 人･･･

以上は、まんたんの英語が不確かなので、間違って理解されたとしておく。でないと、警察官の収賄になっちゃうからである。

最後に何かあったら、この書類を警官に見せて、ジムに連絡をとるようにと、4 枚の印刷物を渡された。

英文およびタイ文の、会社の社長名、軍隊の何とか大佐名の「よろしく状」だった。軍隊が頼りになるのかと考えたが、この国では十数回のクーデターがあったことも思い出した。

英語のレッスンも 3 ヶ月あるはずだったが、試験があって必要ないといわれてなくなってしまった。必要は大ありだったのに。

タイ 40　運転免許証

ドライビングレッスンの報告を受けて、東京が驚いた。車は基本的に運転手さんに運転させる、家族は運転しない、ようにという指示があった。

まんたんはタイの免許を取らないことになった。

普通、外国でドイツで免許を取るときは大変と聞くけど、ぷんぷんは簡単であった。ドライビングレッスンを受けて、国際免許証を持って、みんなと一緒に警察に行ったら、視力検査をして終わりだったという。国際免許証は見もしなかったらしい。

クンチャイに、免許を取るときどうだったか聞いてみた。その昔クンチャイが取得したときは、お金を払えば免許がもらえたという。

ฉบับที่ 38002694 ชนิด รถยนต์ส่วนบุคคลชั่วคราว
วันอนุญาต 23 มิ.ย. 2538 วันสิ้นอายุ 23 มิ.ย. 2539
ชื่อ นายชูจิ โอนุมา
ที่อยู่ 1 ถ.ไอ-3 บ ต.มาบตาพุด
อ.เมือง ระยอง
เกิดวันที่ 1 ธันวาคม 2497
เลขประจำตัว MP1512713
นายทะเบียนจังหวัด ระยอง

タイの免許証、あまり変わりない？
本人もどこが名前かよくわからない

本当だろうと思う。小学生がバイク通学をするのだから、あり得る、ような気もする。

第８部　レディースクラブ入会のお勧め

タイ 41　レディースクラブ入会のお勧め

ドライビングレッスンのときに、パットとイアンが挨拶にきてくれた。

イアンはエクスパッツ（外国人スタッフ）の担当の人で、背の高いオーストラリア人だった。航空会社のパイロットで、世界中あちこちで働いていて、住んだことがないのは日本ぐらいだと言う。

奥さんのパットは、鷲のような顔立ちだけど、まんたんの肩ぐらいの背のやさしい人で、「ヘレンに言っておくから、レディースクラブに入会したら。コンドミニアムにランチの案内が出るから。コーヒーモーニング、コーヒーアフタヌーンにも是非出て」と言う。

レディースクラブ！

まんたんは「ラヨンでの生活」を取り出し、日本で唯一のラヨンの情報であったこと、お友だちのレディースがいないので行きたいと言った。レディースはよく集まるのであった。

ぷんぷんは「いいのか。ぼく、知らないよぅ、ふふふふ」と笑うのである。いやな奴である。

まんたんはちょっと驚いていた。イアンとパットは結婚して 50 年になるという。歳は 70 をゆうに越えているはずだ。それでもこうやって、暑い国で働いている。

日本人なら悠悠自適ってところになるんではないかと思った。

レデイ！パット
How old is she?
How old She is!
まんたんがなぜ着物？
第？部でわかります。

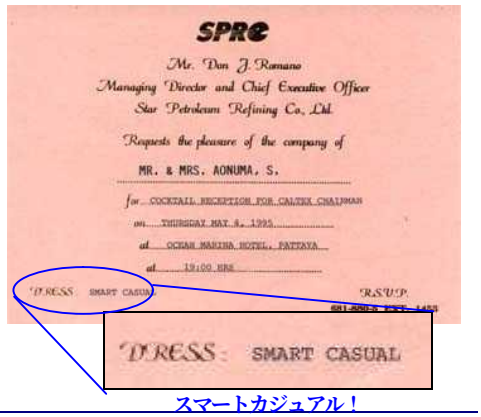
タイ 42　歓迎会

パタヤのホテルで、エクスパッツの歓迎会があると手紙が来た。

「すみやかにお返事を、衣服はスマートカジュアルで」と立派な封筒でご案内が来るのである。

まんたんは、「レディースのための英文手紙」をそっくり写して立派な封筒と便箋にお返事を書いた。まんたんの筆記体の文字はとても美しい。満足してぷんぷんに持たせて届けさせた。

パーティの招待状



SPRC
Mr. Don J. Romano
Managing Director and Chief Executive Officer
Star Petroleum Refining Co., Ltd.
Requests the pleasure of the company of
MR. & MRS. AONUMA, S.
for COCKTAIL RECEPTION FOR CALTEX CHAIRMAN
on THURSDAY MAY 4, 1995
at OCEAN MARINA HOTEL, PATTAYA
at 19:00 HRS
DRESS: SMART CASUAL
RSVP:

DRESS: SMART CASUAL

スマートカジュアル！

ぷんぷんは「こんなん、いいんだぞ。行かなくて」と笑うのである。確かにパーティーもランチもコーヒーモーニングもうんざりするほどあった。

タイ 43　パーティーと洗濯機の因果関係

歓迎会はパタヤのホテルで開かれた。

スマート・カジュアルが何を意味するか、測りかねて、ぷんぷんはジャケット、まんたんはスカート丈長めのスーツにした。皆の衣服を見るに、まぁ、正解だったようなので安心した。もちろん、ロングのドレスの人もいたけれど。

ジムとラム、パットとイアン、首デビをはじめ、知っている人と挨拶し、知らない人とも挨拶し、紹介されて挨拶し、挨拶ばっかりするのであった。けれど、中学校で習ったように挨拶する人はいなかった。

会場となったホテル
結構立派（これは通常の営業日）
やっぱりスマートカジュアルでなければ

「ハーイ」で始まって、ものすごい勢いでしゃべって、「またね」なのであった。

「タイランドへようこそ」
「私たちのボードにようこそ」
が主たる会話なのだが、まんたんはオンリーワン・ジャニーズレディで、「なんて、インターナショナルな会社なんでしょう！」と続くのが例で、うんざりして、日本人がいればインターナショナルかよと言いたくなった。

3 つ印象的なことがあった。

1 つは、南アフリカ人の話で「暴力と人種差別の国といわれているけど、今はそんなことはないのよ。それは素晴らしい国なのよ」と力説してやまない奥さんがいた。それを聞いてまんたんは、逆にその国が力説しなければならないほど、暴力と差別に満ちているんだろうなぁと感じた。

2 つ目は、間違いなく日本と日本人に親しみを持っている人たちがいたことであった。抱きしめてくれるとか、にこやかに近づいてくるとかに関係なかった。どういう人たちかというと、日本に住んだことのある人たちであった。横浜の山手に住んでいたという人がけっこういて、高島屋や日本のイザケヤが楽しかったとかいう話が出て、驚いた。

彼らは、日本の物価の高いのに言及するや逆上するのだけれど、最後に「日本はよかった」「あなたの国はパーフェクトよ」と遠い目をして言ってくれるのであった。ここはよほどひどいんだなぁと思われたことであった。

3 つ目は、翌日気がついた。洗濯機がないので困っていると話をしたのを誰かが聞いていたらしいのだった。次の日、ジムからぷんぷんに連絡があって、冷蔵庫と洗濯機と電子レンジが届いた。

まんたんは、パーティーには怖い側面があるのだと気がついた。同様のことは、あと 2 回あった。こ

れは後にお話する。

親日派の奥さん達は、まんたんの顧問団のようになった。子供のようなのがいるので見ていられなくて、面倒をみようという気になったらしい。

これが、うるさいのであった。

第９部　コーヒーモーニング

タイ 44　フードランド

歓迎会のとき、「パタヤのフードランドに行くべきだ」という人がいたので、クンチャイに頼んで連れてってもらった。

あの感動は忘れられない。フードランドはまさしくスーパーマーケットだったのだ。日本のきゅうりもレタスもあったし、お醤油もお味噌もあった。野菜もお肉もお魚も冷蔵棚に入っていて何でもあった。

これで飯炊きもだいじょうぶ、暗雲が晴れたようであった。ただし、それらがいつもあるとは限らなかった。在庫管理はどうなっておるのだと思ったが、管理そのものが
ないのであった。なくなるという脅迫的な心理から、買いだめをするのが癖になった。

が、逆に言えば買い物はパタヤまで、小一日かけて出かけなければならないのであった。

まんたんはアイスボックスを４つ買い込み、ミネラルウォーターの瓶に水を凍らせて入れ、パタヤまで買い物に行くのであった。そうしないと、ラヨンに帰るまでに腐るのであった。

タイ 45　コーヒーモーニング

コンドミニアムの掲示板に、コーヒーモーニングがあるとあったので、まんたんはお隣さんに行って「参加してもいいのか」と聞くと「もちろん。レディースみんなが参加していいのよ。電話しといてあげる」ということだった。

単独飛行である。

ぷんぷんは「いい度胸だ」とゲラゲラ笑うのである。「まんたんの英語は通じてないと思うから、大きな声でゆっくり話しなさい」と笑うのである。

パットに言われたし、オンリーワン・ジャパニーズレディが非友好的だと思われるといけないと思ったので、行かなきゃと思う、真面目なまんたんであった。

誰かの家が開放される。時間は 10 時。好きな時間に行って、好きな時間に帰る。コーヒーと紅茶を自分で淹れて、持ち寄りのサンドイッチやクッキーでおしゃべりするのである。

こんなお知らせ

まんたんは、日本で自分がこれをできるだろうかと考えた。見ず知ら

ずの外国の人たちを集めて、これは難しいと思った。

会話は珍妙であった。
「ジョン・レノンの妻は日本人である」
「そう、ヨーコ・オノというのである」
「ジェームス・ジョイスのフィネガンス・ウェイクが日本語に訳されたのである」
「ジョイスを読むイギリス人は多くはないのである」
「私は日本語が話せるのである。」
「それはうれしい。話して」
「まんたん、あなたはテニスをしますか」
「いいえ、しません」

そして、必ず聞かれるのが、ぷんぷんの職業であった。どういうわけかこの話になると、みんな真剣になった。しつこく、しつこく聞かれた。後述するが、これはとても重要な問題だったのである。

ある日のコーヒーモーニング
左の会話と関係ありません
前の 3 人は体力で選んだのではありません

困ったのは、「水曜日にランチ」とか言って、次のお約束が決まることだった。なしくずしにお集まりだらけになるのであった。

そうそう、タイではほとんどの家で日本式に玄関で靴をぬぐのだった。

タイ 46　ノンヌッチ・ヴィレッジ

世界的リゾート地、パタヤの近くにまんたんの大好きなノンヌッチ・ヴィレッジがある。そこに行くと、タイの伝統芸能の歌や踊り、昔の戦争の様子、少数民族のお祭りなんかがはダイジェスト版で見られるのである。

ノンヌッチビレッジでのタイ舞踊
豪華絢爛

ぷん、象に乗る
象がえらい？ぷんがえらい？

まんたんは、ここが大好きになった。象さんがいっぱいいるのである。もちろん、象さんが象使いの人といっしょにサッカーをしたり、芸をしたりするのも見られるが、象さんに乗ったり、バナナをやったりすることもできる。

大きな象さんにぷんぷんと乗った。象さんは意外に柔らかな肌をしていて、ぽやぽやと毛が生えていて、乗り心地もふにゃふにゃしていた。建物の 2 階ぐらいの高さになるので、きゃーきゃー、騒いだ。

とりわけ、まんたんのお気に入りは、年取った大きなオスの象さんだ

った。悧巧な象さんで、まんたんが耳に見立てて両手を広げて「パオパオパーオ」と声を出して膝をかがめると、それがわかって、耳をパタパタさせて「パーオ」と叫ぶのだ。

象さんにもいろんな性格の奴がいて、バナナを持っていると追いかけたりするのがいたが、このパオはそんなことはしなかった。

クンチャイは、こうしてぷんぷんとまんたんが喜んでいると大喜びするのであった。

まんたんが元気なさそうだと、ノンヌッチに行こうと言うのだった。クンチャイによると、日本人は仏教徒なので、象さんが好きなのだということになった。

好意的なのはわかったが、なんでそういう見解になるのか謎であった。

パオパオパーオ！
まんたん、キャーキャー
ふたつ合わせてパオーキャー

タイ 47　水

コンドミニアムでは水は 3 種類あった。水道から出る水、ミネラルウォーター、そしてその中間ぐらいのドリンキングウォーターである。

突然ですが、水道があるのは素晴らしいことです。けれども、水道からいつも水が出るとは限りません。いつでも水道から水が出るのは奇跡的に幸せなことです。

さらに、水道の水は飲めなかった。ミネラルウォーターは高いし日本風の料理には向いていなかった。そこで、ドリンキングウォーターのお出ましとなる。

週に 2 回、ドリンキングウォーターの搬入日があって、15 リットル入りのプラスチック容器に名札を付けて、フロントのところに出して置くと夕方までにはお水の入ったのと差し替えてくれるのだった。

まんたんは容器が 7 つ必要だった。これは他の住人に多すぎると不思議がられたが、普通に生活しているとそれだけ必要だったのだ。

15 リットルの水は持ち上げるだけで、大仕事。タイに行って、腕がたくましくなったのはそのせいだと思う。もひとつ、指の節が高くなって結婚指輪が入らなくなったのもそのせいだと思う。

水！
15l×7=105kg
ぷんぷんより重い

それでも、水が配達されればよかった。時々、配達が中止されるのである。そういうときは、マネージャーのクンコンに住人が結束して善処を求めても、無駄だった。どうなるかというと、みんなで声をかけあって、車を融通しあって水買いに走るのである。

ポラリスとネプチューンというメーカーの水を買うのであった。

第 10 部　インディアン大王

タイ 48　首デビの首

後ろに立っている人が Fire と言った人
この写真はぷんぷん達の Farewell Party

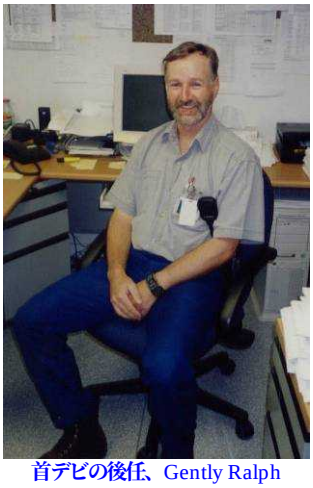
ぷんぷんが会社から電話をかけてきた。
「まんたん、首デビがアメリカに帰るよ」
「えっ、何で？」
「今日という今日は驚いた」
「だって、どうすんの？奥さんアメリカの家、売ってきたって言っていたよ」
「うん、ま、帰ってから話すけど、ま、すごい」

装置の運転関係者が、この時期代わるなんてことは考えられないことである。なんか、あったんだろうかと心配になった。

結論から言うと、奥さんのダイアナが住んでいるコンドミニアムのあまりにひどい状況は、ジム（例のジムである）の怠慢であると激烈な FAX をジム宛てに送ったのが発端であった。

それが著しく感情的なものであったので、ジムは社長に訴えた。社長はダイアナにジムに謝るように言い、謝らなければ首デビを解雇すると言った。ダイアナは謝らず、首デビも奥さんが正しいと、ダイアナに謝ることを求めなかった。

で、敢然とアメリカに帰ったのである。


首デビの後任、Gently Ralph

これは、仕事、奥さん、自己主張、さまざまな意味で考えさせられる出来事だった。日本ではちょっと考えられない、すっぱりと割り切るアメリカを見た気がした。

ぷんぷんはキャメロンから「デビがタイランドを離れる」と聞いたとき、「いつ、もどるのか」と聞き返したそうである。「デビはファイアーされた」と言い直されたとき、一瞬、火事がどうかしたのかと思ったそうである。解雇という英語を実際に聞く状況とは信じられなかったそうである。

何ごともなかったかのように、カナダからラルフが後任に呼ばれた。

タイ 49　レディースクラブのランチョン

600 円払うと会員になれるのである。パットに言われたので出かけた。これは、まんたんには大きな出来事だった。

ゴルフ場のクラブハウスに 150 人ほど集まっての、昼食会だった。ヘレンという人が何か言っているけど、もらった「ニュース」の方が衝撃的であった。

「ニュース」はクラブが何なのか、充分によく教えてくれるものだった。衣食住すべてにわたる情報、会員の消息、サークル活動、タイの風俗と習慣に関する注意事項、献血が必要になった場合の協力者グループの設置、チャリティーなどまんたんは、「ラヨンでの生活」がこういうところから生まれた本であるとつくづくと納得された。

クラブハウスの写真がないのでゴルフ場の写真
打つは森 獅子サン

まんたんのお隣は、パトリシア・マルチンだった。「まんたん、これは会員のリスト。あなたが援けを必要なときはここにある誰にでも、何時でも連絡を取って。必ず援けてくれる。」

まんたんは、さすがに世界に冠たる帝国主義の国々の方たちであるとか、思おうとしたが、正直なところ、圧倒されていた。自分にこれが言えるか。例えば日本でこれができるか。

この問いはずっと、まんたんの心に残っている。自分が言ってもらった以上、だれかにいつか、こう言わなくてはならないと、借金をして返さないような気分なのである。

タイ 50　ぞうきんの運針　～インディアン大王～

クンチャイがインディアン大王だと言って、運転手さんを紹介してくれた。

インディアン大王！なんだ？このタイランドにアメリカインディアンの王族の末裔でもいるのだろうか。

まんたんには、確かにインディアン大王と聞こえたのだ。はい、もちろん、大王なわけありません。ダイウー、ドライバーでした。

というわけで、まんたんはコンドミニアムにインドの人が住んでいることを知った。インドといえば、レディースクラブの会報「ニュース」にパッチワークのサークルをやっているインド人のバサンタがいるとあったので、大王に聞いてみると、果たしてサークルの主催者であった。

クンコンに聞いて、バサンタを訪ねると、一度、見においでというので、ミシンも持ってきているし仲間に入れてもらおうかと思った。パッチワークというと、イギリスやアメリカのご婦人たちの得意技で、蜜蜂のように集まっておしゃべりをしながら針仕事をするというイメージがあったのだが、ご婦人たち全員が得意技としているのではなかった。

布をハサミでまっすぐに切れない人もいた。どうするか、布を裂くのである。まんたんは、びっくりした。「このほうが、まっすぐに切れるのよ」

針を持ちなれないような人もいた。どうなるか、小学校のときにやったぞうきんの運針みたいなパッチワークになるのである。みんな、それぞれのやり方で満足して楽しんでいるのである。

が、まんたんはあまりの不器用に驚いて、サークル参加をやめてしまった。日本人が器用だというのはほんとだと思った。

第 11 部　コンドミニアム動物記

タイ 51　コンドミニアム動物記　～蟻～

ぷんぷんとまんたんのおうちは 15 階のお部屋だったが、コンドミニアムというところは動物の多いところだった。

ある朝、お台所のカウンターに黒いおはぎのようなものがあった。何だろう、何か出していたかしら、と思って近づいたまんたんは、「ぎゃーっ」と叫んだ。片付け忘れたクッキーに無数の黒蟻がたかっていたのである。そのままビニールの袋に入れて捨てたが、ハエ叩きで狂ったように蟻退治をしても、どんどん、蟻がやってくるのである。

15 階までの長い旅をした黒蟻が、たった 1 個のクッキーを目指して、入口ドアから押し寄せてくるのである。

まんたんはスターマーケットで、髑髏マーク入りの殺虫剤を買ってきて撒いた。そのときから、環境のために殺虫剤はいけないなどとは、口にする資格を失ったのである。

黒蟻はまだよかった。まれに赤蟻が来た。これはチクチク刺すのでいやだった。

タイ 52　コンドミニアム動物記　～とかげちゃん～

どの部屋の壁にも、10 センチくらいの肉色のとかげが這っていた。まんたんは PMY ホテルでワニと遭遇してから、これが苦手で、ハエ叩きで追い回していたが、すぐに放っておくようになった。

とかげちゃんは、壁を棲家として人に近づいてこないし、キュルと鳴いて可愛らしくなった。何より、まんたんの憎む蟻を食べてくれるのである。

好き嫌いは多分に比較の問題である。ゴキブリを憎むこと尋常でない他のレディースも、とかげちゃんには寛容で、「うちの子の友だちなのよ」なんてごまかして、同じく放っておくのだった。

しかし、壁だけを棲家にしていたのではないことが、日本に帰ってからわかった。

タイから送ったプラスチックの衣裳ケースの底に、変わり果てたとかげちゃんが乾燥していたのである。

前にも登場したとかげちゃんです
ちゃんがつくくらい、もう平気

タイ 53　コンドミニアム動物記　～その他～

ガーデンというだけあって、美しく整備された庭は、コンドミニアムのセールスポイントであった。あの浜辺では、庭も椰子の木も、水撒きと手入れとによって人工的に作られたものなのである。

で、その美しいプール脇の茂みや花木は蟻の生息地でもあった。熱帯の浜辺の木陰で午睡をということをお考えの向きは、蟻に充分注意なさった方がいい。

また、蛇がいることをお忘れなく。肉色の蛇は大丈夫だけれど、緑色のはまことに危険である。後に改めてお話したい。

そして、レストランのねずみ。あまり大きかったので、まんたんは最初、猫かと思っちゃったのだ。あのねずみを見てから、
コンドミニアムのレストランで食事をするのはとても難しくなった。
あれを見たら、みんなそうなると思う。

しかし、これらの動物たちに驚くなんて、タイを甘くみていたのである。雨季の凄まじさを知らない、幸せな驚きだったのである。

コンドミニアムの入口
見てもらいたいのは後ろの風景

第 12 部　哲学メカと力自慢

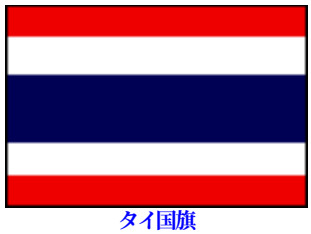
タイ 54　テレビ

テレビをつけたら、突然日本人が出て、当然のようにタイ語を話し出したら、驚くと思う。

その日は少女時代のおしんがタイ語を話していた。「おしん」がアジアに広く放送されて好評を博したというニュースが繰り返された後だったから、何度目かの再放送であったと思う。

が、その日、午後 3 時過ぎに放送されたきり、二度と「おしん」の放映はなかった。今でも謎なのである。プログラムは融通無碍なのかもしれなかった。

しかしながら、間違いなく毎日放送される番組もあった。午後 6 時になると、はためくタイ国旗が画面に出て、国歌が流れるのである。ジャジャジャンジャジャジャジャジャジャーン、おかげでタイの国歌は今でも耳に付いている。


タイ国旗

そして、国王陛下を始めとするロイヤルファミリーのご日常がくわしく報道される。

日本にいる頃、椅子に座られた国王陛下の前に、政府代表と反政府代表が呼ばれて床に横座りになり、国王陛下の説得を受け、あわやクーデターという状況が回避されたというニュースを見て、驚天したことがあったが、やはり、王室への尊崇の念は高いのである。

まんたんとぷんぷんはこの番組を「王室アルバム」と名付けたが、日本の似た番組とはだいぶ、趣が異なるのであった。

タイ 55　哲学メカと力自慢

そのテレビが映らなくなると、管理人のクンコンに電話してメカニックに来てもらうのである。

メカニックは 2 人いて、1 人は白髪交じりの、年配のおひげを蓄えた立派な風貌をしていた。何やら、哲学的ですらあったので「哲学メカ」と呼んだ。しかし、哲学でテレビが映るということでもなく、映る時間より、映らない時間の方が長いくらいであった。

力自慢の運んだ左のテレビ
見た目より大きい
右はタイで購入したメイドインタイランドのテレビ

もう 1 人のメカニックは若い男の子で、この子は、形だけテレビをいじると「トゥモロ」と言って 1 人でテレビを担いで、持って行ってしまうのだった。彼を「力自慢」と呼んだ。何度、力自慢がテレビを持って行ってしまったこと

だろう。どうなったか。

ビデオがついてなかったこともあって、まんたんとぷんぷんは自前のテレビを購入したのである。

メカニックというからには、電気製品とか工務系の訓練を受けているのだと信じていたが、そういうわけでもなかったようだった。暇な時、力自慢は庭師さんに変身して、お庭の水遣りに励むのであった。

哲学メカは、後にドイツ人のお医者さんの運転手さんに転職したのである。

哲学メカ、雰囲気が学者っぽい

タイ 56　クンコンの恋

コンドミニアムでは、香港からの衛星テレビ放送が受信できるという契約になっていた。アメリカのニュース放送が見られるので、英語がわかんないまんたんも、一生懸命に見た。ニュースはあれだけが頼りだった。これも謎なんだが、懸命に見ると何を言っているかわかってくるのである。

ところが、これがいつも映るとは限らなかった。住民はこぞってクンコンに訴えるが、無駄であった。クンチャイに聞くと、コンドミニアムのオーナーが受信料を払わないと映らなくなるということだった。

あるアメリカ人が逆上して、クンコンに抗議していた。居合わせたまんたんは、その時のクンコンの様子におやっと思った。まんたんと話す時より、あきらかに、親切で丁寧なのである。

ここで、アジア人のアジア人蔑視とか難しいことを考えてはいけません。椅子に浅く腰掛けたクンコンは、うつむいた顔から潤んだ瞳を上目遣いに上げ、頬を赤く染め、小声で話しているのである。

クンコン、第 6 部以来、再登場
花、花、

あぁ、恋をしている、まんたんはそう感じた。アメリカ人は、怒って契約を破棄し、パタヤのコンドミニアムに引っ越してしまった。気のせいか、クンコンはしばらく元気がなかった。

まんたんの感じたところで、事実と断定できるものではありません。おかしいことはない。おかしいことはないんだが、そのアメリカ人は男の人だったのである。

第 13 部　タイ伝統舞踊の公演

タイ 57　タイ伝統舞踊の公演

マリアン・ファブリシアスが、バンコクの大学のタイ伝統舞踊の研究グループを招聘して、ラヨンで公演をするというので、まんたんは喜んで、マリアンのお家を訪ねて、チケットを買った。

タイ民族舞踊？(1)

イギリス人のマリアンは、コンドミニアムに住んでいたのである。お部屋に招き入れて、コーヒーをごちそうしてくれて、それは親切であった。

タイの本当の伝統舞踊を見たことがないので、大学に話をしたら予想外に簡単に話がまとまったこと、日本の伝統舞踊にはどんなものがあるかとか、たくさん話をした。

まんたんは、マリアンが大好きになった。少しも騒々しくなく、考え深い目がやさしくて、今でもあんな立派なご婦人はなかなかいないと思っている。金ゴリラとはまったく違うのである。

タイ舞踊？(2)

まんたんは、久米歌、雅楽、能、歌舞伎、いわゆる日本舞踊の話を、あやしい英語で説明したが、マリアンは能、歌舞伎は知っていて、熱心に聞いてくれるのであった。

しばらくして、今度はマリアンがまんたんを訪ねてきた。まんたんも、招き入れ、日本茶と取って置きのようかんをご馳走した。何の用だったか。会場の手配もしたのに、バンコックの舞踊の人が来ないと言い出したというのである。マリアンはお金を返して、まんたんはチケットを返した。

うんざり顔のマリアンに、まんたんは「この国ではこういうことが多い」となぐさめた。どっかで、聞いたせりふであった。

確かにそういうことが多い国であった。いや、むしろそうでないことの方が、珍しい国であった。

タイ 58　殺人事件

タイでは年間 138 名の日本人死者が出る、というのはバンコクの銀行でもらった日本語の「週報」で知った。が、まんたんは、そんな怖いことは、バンコクのことであって、ラヨンのような田舎では起こらないとばっかり思っていた。

ラヨンで日本人が殺されたと教えてくれたのは、クンチャイである。パタヤに住んで、ラヨンの仕事

先に通っていた日本人がここの畑で、ガンで撃たれて死んだと聞いたときは、ぞーっとした。犯人はわからないが、運転手さんがあやしいとクンチャイは言うのである。

まんたんは、おかしくなった。自分だって運転手さんなのだから、ことあればあやしいと言われるかも知れないのに、そんなことはまったく考えない人の良さなのである。

でもね、正直にいうと、クンチャイが手引きして、襲われたら逃げようがないなとちょっと、怖かった。

もっと怖かったのは、ガーデンとは別のコンドミニアムで「ここで日本人がナイフで刺し殺されたのよ。」と嬉しそうに、そこのマダームに言われたときだった。

もっともっと怖かったのは、東京情報で、この 2 つの殺人事件が事実で、まんたんでも知っている会社の人が被害者だったことがわかったときだった。

出発準備のとき、パスポートを見て考えたことを思い出した。外国にあっては故障のない旅行も保護扶助も基本的には存在しないのである。やはり、これは海外に行く人は忘れてはならないことだと思う。

第 14 部　ラヨンマーケットの攻略法

タイ 59　ラヨンマーケットの攻略法

これから始まる、驚愕のラヨンマーケット物語。その前にラヨンの海の絶景を

最初の衝撃的な印象があったので、まんたんはラヨンマーケットにどうしても買い物に行けなかった。スターマーケットも豆腐で懲りたので、食料はパタヤのフードランドで調達していた。

ならば、なぜラヨンマーケットに挑戦する気になったかというと、新鮮なものを手に入れたいという切実な問題を別にして、「ラヨンマーケットで買い物ができない」というのが、まんたんは自分に許せなかったのである。

ラヨンマーケットの入口
今でもよく分らない

攻略法は周辺から攻めるであった。マーケットの周囲にあるたくさんの入口から、ちょっとだけ入ってすぐに出てくるのである。これなら中で迷子になって、誘拐されることもないと思った。

ラヨンマーケットの衣類屋さん
何でも売ってます

そして、クンチャイがこの攻略法の最大の貢献者であった。どこにでも、クンチャイの知り合いがいたのである。ま、クンチャイは誰とでもおしゃべりをするので、その時に知り合いになったのかもしれないのだけれど、心強かった。

クンチャイの友だちのじゃが芋屋さん、衣類屋さん、野菜屋さん、などを起点にちょこっと入って出て、を繰り返し、まんたんは攻略に成功した。1 人ではできなかったと思う。

ここでどんなお店が並んでいたか、これを話し出すと止まらないのだけれど、止まるまで聞いてね。

タイ 60　お花屋さん

ラヨンマーケットへのラヨン病院側の入口はお花屋さんだった。お花屋さんは、蘭の花でいっぱい。あぁ、南の国だなぁと驚く。日本ではけっこうなお値段のシンビジウムみたいなのが、扇を開いたように束になっていて、60 円とか 100 円で買える。最初は蘭の美しさと値段に感動してごっそり買ってはお家に飾っていた。

が、いつもいっぱいあると勝手なもので、珍しくなくなるのである。日本の花屋さんには、お花、葉もの、枝ものが、季節によってさまざまに並べられ、季節そのもののうれしさを感じさせてくれる。

花屋さんの花、日本だったらン百円？

そういうことはない。ぷんぷんは蘭の花の匂いがあまり好きでないと言い出した。確かに、飾っていると、熟したような腐ったような気配がするのである。

そうして、蘭の花以外の花が入荷するのを待つようになった。と、これが高いのである。いばらという感じの小さい薔薇、菊の花、すかしゆり、カーネーション、こういうのがけっこう高いのである。高いけど、懐かしくて買った。

まんたんはお花屋さんの大得意であった。

タイ 61　イカ屋のおばちゃん

イカの専門店のかたまりがあった。種類も大小もさまざまなイカが氷を浮かべた入れ物に並べられている。

ある日のイカ屋のおばちゃん
いか、イカ、烏賊

イカは大好きである。足とわたが抜いてある、ふやけたようなのもあったが、まだ生きている新鮮なのがあったりすると、大喜びで買った。

当然、イカ屋のおばちゃん達はまんたんを大好き。

2 年後のある日のイカ屋のおばちゃん
いか、イカ、烏賊

まんたんが行くと、例の「イープン」がはじまって、歓迎してくれるのであった。問題は、どのおばちゃんから買うかであった。けっこう気を使うのであった。

というと、イカ刺しを食べたのではと思われる方もいると思う。まんたんも、刺身でいけるのではと期待したこともあった。

ピカピカのをイカそうめんにしようとしたときのことであ

る。内側の表面にごくごく小さい白い点々があった。目の悪いまんたんは、最初点々すら気がつかなかったが、寄生虫のようだった。あたたかい海では、そういうこともあるかと、妙に納得されたのであった。

鮮度がよければ刺身にというのは、まさしく日本人の発想だったのだ。

タイ 62　野菜屋さんの野菜

野菜屋さんは、八百屋さんではない。ラヨンマーケットでは、売り物は細分化されていて、とうていひとくくりにできないのだ。果物は、種類ごとに売り場があった。

まんたんは、タイがいかに食べ物が豊かであるかの証明だと思った。本当にさまざまな食材があった。

日本のものとは違うけれど、おなす、きゅうり、白菜なんかもある。あぁ、万能ねぎは同じだった。新ショウガのようなカー、紫小たまねぎ、空芯菜、香菜、菜の花の大きくなったの、こぶみかんの葉、生のとうがらし、レモングラス、珍しいものもいっぱいだった。

野菜売り場
同化している人、ラヨンの野菜で 1 年暮らした人

ただ、野菜屋さんは露店で、雨が降ると、覆いのテントから、じゃあじゃあ、雨水がこぼれてくる。ときどき、どうみても清潔ではない茶色の水が、野菜たちに撒かれる。

そして、日本の八百屋さんやスーパーで売ってる状態ではない。いわゆる泥つきって感じで、虫食いも、傷みもある。

どういうことになるかというと、まんたんは、クンチャイに手伝ってもらって、山のように野菜を買うことになるのである。お家に帰って、冷蔵庫に入れる前に水洗いをして、傷んでいるところをとると、食べられるところは、ほんのちょっとになっちゃうのである。

クンチャイには、なんだか悪いような気がして言えなかったし、言ってもわかってもらえなかったと思う。

而して、「マダムは料理が好きである。ボスは大きいのでいっぱい食うのである」ということになるのであった。

タイ 63　なまず屋のおねえさんの神技

小柄で、少し色黒の目が大きくて、かわいいなまず屋のおねえさんの神技には、ほんとうに見惚れた。

まんたんが、見ているのに気がつくと、にっこりやさしい微笑を浮かべて、神技にさらに力が入るよ

うであった。

おねえさんは、土間にお風呂の椅子を置いて腰掛け、木の切り株のまな板で、生きているなまずを、鉈のような刃物でぶつ切りにしていくのである。

まず、左手で頭を下にしたなまずをつかまえ、右手の木の棒を口から押し込み、そのなまずの串刺しを左手にもちかえると、右手で鉈をつかみ、尻尾のほうから、ぶつ切りにする。数秒の早業。

まんたんは、見惚れながら、血の匂いで、血の気が引くのであった。

なまず屋のおねえさんの神技
そう、タイトル通り

タイ 64　蟹

大きな蟹は、わらでしばって、通路脇に積んであった。これは渡り蟹のような蟹で出汁用にした。身を食べたような気分になるには、山ほど買わなければならないのである。

小さい蟹は、金属製の洗濯たらいに入れてあって、青いパパイヤの細切りサラダのソクタムに欠かせないらしかった。らしかったというのは、作ったことがないからである。タイに行った人がソクタムを食べたというと、まんたんは、背筋が寒くなる。

これがソクタム、青いパパイヤサラダ
おいしい！ということは食べたということ？

タイではカレーやトムヤンやソクタムの調味料を小さな石臼でつぶして作る。

見ちゃったのだ。これはラヨンだけなのかもしれないけれど、ソクタムの風味付けの小さな蟹は生だったのだ。

肝炎の素！

まんたんは、ぷんぷんにソクタム禁止令を出した。

タイ 65　豚の展示会

うーん、これもすごかった。

内臓を取った状態の豚を、鉈で切っていくのである。力がいるせいか、豚屋さんは、みんな男の人だった。ばっしばっしと大胆にカットされた豚は、お店にある 5 センチの格子の金網に展示されていく

のである。

買うときには、さらに切ってくれるのだったが、うーむ、金網に、血もしたたる豚の顔の半分が引っかかっているというのは怖いものがあった。

腿の部分も実になまなましいものであった。熱いところである。その匂いもまたすさまじかった。

どうしてもお肉はパタヤの切ってあるのを買ってしまった。

見るのは後ろ、豚肉というか、豚です

タイ 66　サバ

鯖は、冷凍ものだったけど、日本と同じ物があった。味噌煮にしたので、よく買った。ほんとに不思議なんだけど、同じなのは味や大きさだけではなかった。

鯖を見たまんたんが、思わず「さば！」と言ったら、売ってるおじさんも、クンチャイも、にこにこして、「サバー！」と語尾をあげて言うのである。

タイ語でもサバと言うのだった。日本に輸出してるかなんかで、サバになったのか。東南アジアで広くサバと呼んでるのが日本にも伝播したのか。いろいろ考えたけど、いまだにわからない。

魚一覧
サバがあるかどうかは？

タイ 67　椰子の実

椰子の実は１種類ではない。当たり前だけど、まさかあんなに種類があるとは思わなかった。クンチャイに聞くと、食べるもの、ミルクを取るもの、油を取るもの、いっぱいあるということだった。

ココナツジュースを飲むのはご存知の方も多いと思うけど、青い小さな実で、頭のところを切って、ストローで飲むのである。

まんたんは、これがどうしてもおいしいと思えなかった。薄甘い、青臭いような味で、甘いものがないときにはとてもいい飲み物だったのだろうけれど、飲みたいと思うものではなかった。

おもしろかったのは、ココナツミルクを搾っているお店だった。茶色の皮をむいた椰子の実の芯というか種の黒い部分を取り出し、その中身の白い部分をえぐり出し、千切りにして、機械で搾るのである。

ラヨンマーケット近くの露店
ココナッツミルクのお好み焼き？

白いミルクがほとばしっているのは、芳醇な感じがして見ていて飽きなかった。

タイ 68　チリ

いつまでも終りそうにないので、一応の〆に、やはり唐辛子のお話を。

唐辛子も 1 種類ではなかった。大きく分類すれば、生か干したのかになる。

生は赤唐辛子を売ってるんだけれど、これはそんなに辛くなかった。生食の他に、自分で干して、切って、一味唐辛子風にするのらしい。生の青唐辛子、これが辛い。レストランの料理に 2～3 センチほどのこれが、入っていたら要注意。まず、避けた方がいい。知らないで、口にして噛んだりしようものなら、口からお腹まで火傷したような具合で、むせこむこと必定。

第 3 部にも出てきた写真
人間成長の記、慣れです、結局は

ぷんぷんとまんたんは、爆弾と呼んでいた。慣れたけれども、それでも、思いっきりこれを食べちゃうと、頭がいたくなるのであった。

干した赤唐辛子は、干した状態で売られていることもあったけれど、粉末一味唐辛子状のが、圧巻だった。何種類もの唐辛子が円錐状に盛り上げられて、さあ辛いわよって並んでいる。そこの空気を吸い込んだだけで、辛かった。

食卓調味料セットに必ずある唐辛子である。タイ風の辛さに慣れたぷんぷんとまんたんは、日本でも盛大にこれをかける。そうでないと、ものたりないのである。たぬきうどんを食べるときなんかでもそうなのである。

第 15 部　もの言うこと

タイ 69　もの言うこと

「この装置は世界に 2 つしかない。完璧に稼動しているのは、日本のものただ１つである。私がそれを稼動させた。したがって、私は世界で唯一、この装置を稼動させることのできる人間である」

もの言わねばならなかった人達(1)
スフィアン、キャメロン

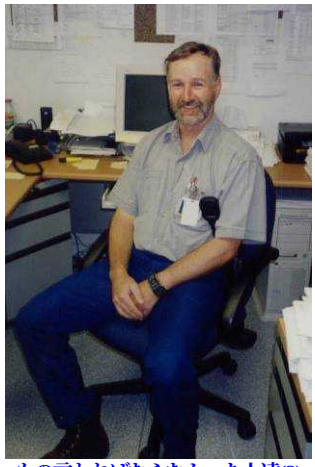
なんて日本で言ったら、それが事実であっても、そう口にする人間の人間性の点ではなはだ不評を買うのは、まず間違いないのではないだろうか。

しかしながら、ぷんぷんは、それを言わねばならぬ環境にあった。英語ならば言えるんだそうである。

もの言わねばならなかった人達(2)
イアン、プンプン

「北京のシンポジウム、東京のパネルディスカッションで、私を見たことがあるはずである。すべてのデータは、ヘッドオフィスのマナジャーである私を通して、東京から送られるのである」

なんて日本で言ったら、総スカンものではないだろうか。その結果どうなったか。ぷんぷんはめでたく昇進あそばされた。


もの言わねばならなかった人達(3)
ラルフ

もの言うことの必要な世界であった。辟易するほどの、自己主張の世界であった。能力主義というのは実に厳しい階級社会だった。

辟易したのに、ぷんぷんは今、あのもの言う世界が懐かしく思えることがあるという。

タイ 70　お集まりだらけの謎

やたらにレディースのお集まりが多いというのはお話したけれども、まんたんは、それをそういうもんなんだと思っていた。けれども、そういうもんだけではなかったようなのである。

まんたんの個人情報については誰にも話したことがないのに、なぜレディースが知ってるのか、不思議でたまらなかった。

どうやら、ぷんぷんの自己主張のおかげで、改めてどこかで何者かという確認作業が行なわれ、どこかで面倒をみてやるようにと指示が出ていたようなのである。そういうもんだなんていうのは、甘かったのである。

タイ 71　仕事の違い

さて、数あるお集まりで、まんたんが困ったのは、ぷんぷんの日本の会社のことを聞かれるときだった。

もの言わねばならなかった人達(4)
スティーブ

まんたんは、ぷんぷんの会社のことを知らないのである。かててくわえて、レディースがもっとも関心を示し、シーンとしてまんたんの話を聞こうというのは、この話のときなのである。

本社があって工場があって、本社と工場は別の会社なんだけど、本社にいくと両方の社員で、工場の会社は本社の会社とアメリカの会社が株を折半していて、タイに来るときは技術支援なので、前例に従って技術部門の会社に出向して、本社ではマナジャアなんだけど、出向先ではゼネラルマナジャアで、日本に帰ると本社に戻るんだけど、工場に転勤するだろう。

もの言わねばならなかった人達(5)
オーストラリア人、日本人、タイ人

この日本語わかる方がいるだろうか。まんたんはわからない。英語なら、よけいわからないはずである。したがって、繰り返し聞かれる。なんで、こんなにしつこいのか、うんざりした。

実は、ちゃんと切実な理由があったのである。他の国の人たちは、日本のように同じ会社に勤務することが普通ではないのだった。

能力や経験や実績によって、会社も仕事も次々と変えるのがむしろ普通。契約によって、世界中の条件のいい仕事に就いていくのだった。

もの言わねばならなかった人達(6)
でも、みんな仲間でした

すごいと思ったが、こんなに必死になって、気の毒なことだなぁというのが実感だった。

第 16 部　金行

タイ 72　銀行

タイ・ファーマーズ・バンク・マプタプット支店に、ぷんぷんはパスポートを提示して口座を開設した。日本からの送金がここに振り込まれる。

うーん、システムは同じ。キャッシュカードもお通帳も日本と同じなんだけど、自動支払い機は、ご機嫌のわるいときは、カードを返してくれなくなる。

窓口は、うーん、非能率の極みの傾向があり、カウンターの内側で、子供が遊んでいたりするのである。

クンチャイのお友だちに口をきいてもらっても、時間がかかるのであった。日本なら、暴動が起こると思う。東京は、タイ風の銀行業務を理解できない。

タイファーマーズバンク
泰国農民銀行
マプタプット支店入口

これは郵便局入口

送金するとすぐに、振込みと手数料の確認を求める。うーん、決まった日数でなんてことはないのだ。4 日のときもあれば、7 日のときもあった。手数料も微妙にちがうのだけれど、その理由を聞いても、おそらく銀行でもわからないと思う。けれども、送金が届かなかったことは一度もなかった。これだけは言わなければならない。

タイ・ファーマーズ・バンクの看板は 3 種類の言葉で銀行名を書いてあった。タイ語、英語、中国語であった。漢字で、泰国農民銀行とあるのを見ると、何だか、農協に口座があるような感じがした。

これは、もうひとつ重要な意味がある。タイの金融関係は、チャイニーズ・タイの人たちの資本が席捲してるということであった。

タイ 73　金行

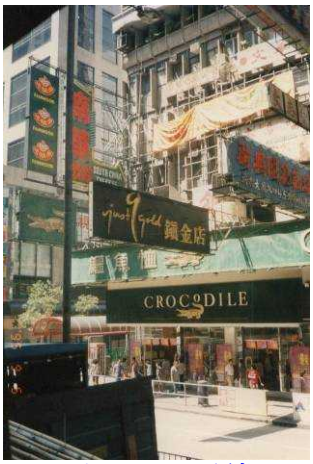
中華料理屋さんの入り口の左右に、よくめでたい文言の書いてある聯がある。

タイで赤地に金文字の華々しい聯があったら、それは金行である。宝石もあるけれど、主として金製品を売ってるお店である。売ってるだけじゃなくて、買い取りも業とする。

クンチャイが勧めてくれるので、知り合いだというお店に行った。例によって、念のいったクンチャイの紹介、説明で、たいそう愛想をよくしてもらったのだけれど、金なのである。アクセサリーとしてのデザインとかが問題にされているのではなく、金なのである。

お金のあるときに買って、困ったときに売る。いわば、金本位制なのである。

これはバンコクの金行



これはホンコンの写真
中国人は金（色）が好きです

まんたんは金を買わなかったので、マダムは金には興味がないということになったが、クンチャイは、金はどんなことがあっても大丈夫なのにと、残念そうだった。

もちろん、お金も銀行もあるのだけれど、ことあれば当てにはならないという現実的な感覚が生きているような気がした。

クンチャイも大きなルビーのついた金の指輪をしていた。そして、聯に注意である。富はチャイニーズ・タイの人たちに集まっているのが実感としてわかるのである。

第 17 部　初めてのホームパーティー

タイ 74　まんたんランチを主催する

あちこちにお呼ばればっかりしていると、お返しのことが気になる。そこで、まんたんはお世話になったレディースをランチにお招きすることにした。

海外で初めて人寄せをするのは、ドキドキする。お料理はどうしようかしら。来てくれるかしら。楽しんでくれるかしら。そして、一番の心配は、当日停電になったら、どうしようかであった。

ある日のランチパーティ
逆光でみなビューティフル！

数日前から、飲み物をそろえ、食器を洗い、お花を飾り、当日は朝の 6 時から準備した。サンドイッチにちらし寿司、スパゲティ、鶏のから揚げ、クッキーにチョコレート、フルーツ、お献立はこんな簡単なんであったが、停電になっても、なるべく困らないようにと考えたのである。

結果、大成功。

最後にお抹茶をお出ししたのだけは、あきらかに不評であったが、みんな勝手に楽しんでくれて、ドキドキしたのがほんとに取り越し苦労であった。

ただ、面白いことがあった。早めに来たベルギー人の奥さんは、まんたんがお流しに出しっぱなしにしている洗剤とスポンジ水切りカゴを、天袋にしまっちゃったのである。日本では不思議じゃないと思うんだけど、どうもこういうものを出しておくのは、知性と人品を疑わせるものであるという按配であった。

また、ある日のランチパーティ
前にも出てきた･･･トリオ

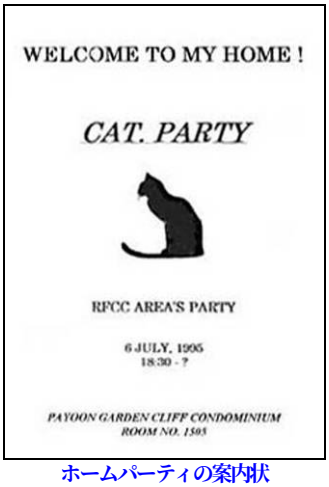
とにかく､家の中は片付いてなくてはならないのであった。

タイ 75　初めてのホームパーティー

ランチで自信をつけたまんたんは、ついにホームパーティーをすることになった。ぷんぷんが会社でトレーニングにあたっているスタッフをお呼びしたのである。

招待状は省略したが、30 人と夫人が参加することになった。ランチもドキドキしたが、これはもっとドキドキシした。エキスパッツは知っていたけれども、タイ人のスタッフは初めてだったのである。

1 週間前から準備が始まった。



ホームパーティの案内状
Cat は本当は Catalyst の略で触媒

出席者の名札を作り、まんたんとぷんぷんは、まず名前を覚え、お話する話題のために、それぞれの人の情報を暗記した。家族は、仕事は、住まいは、留学先は、といろいろあったが、名前だけでも大変だったのである。ブンラー・チャイソムトラクル、ティラワット・ネ・スワンとか、覚えにくいタイの名前に難渋した。

飲み物は、ビール、ジュース、シャンパン、ワイン、日本酒、ウィスキー、まるで酒屋さんになったみたいだった。

パーティ開始、30 分、食べてます
まだまだパーティ、まだまだの意味は次へ

食べ物はランチと同じくビュッフェスタイルとし、サンドウィッチ、おにぎり、スパゲッティ、酢豚、茹でたイカのにぎり寿司、マリネ、サラダ、クレープ、鶏のからあげ、すき焼き（のようなもの）、エビのてんぷら、思い出すのはこんなところである。

盛り下がるといけないので、あみだくじとジャンケン大会を組み合わせたものを、実施し、賞品を準備した。

前日から部屋をしつらえ、当日は午前 3 時から、準備に入った。ひたすら、停電にならないことを祈った。

始まったジャンケン大会
タイ人はジャンケンを知っていました

タイ 76・国際大盆踊り大会

お呼びした方も心配したが、呼ばれた方も不安だったらしい。ふつう、パーティーはエクスパッツだけであったから、どんなものになるのか、これはお互いドキドキだったのである。

パティバット、持っているのはまだ水
彼曰く、ウォラー

ロイカトン、盆踊り大会
熱気に写真もボケル

午後 6 時にということだったが、6 時から 6 時半くらいにバラバラと集まって飲み始める。どういうもんかなぁと思ったが、自己紹介が始まって、お酒が回り始めると、俄然活況を呈した。

最初、こわばった顔で「私はお水をもらう」とか言ってたパティバット・ティバサスティが、「日本のライスワインはおいしい。サケー」とか言ってくれたときに、まんたんはひそかに成功の手ごたえを感じた。

歌が出て、最後はタイの満月まつり、ロイカトンの唄になり、皆で輪になって、ロイカトン踊りになった。

ロイ　ロイカトン　ロイ　ロイカトン
ロイカトン　ガレ　コチャノ　テオカラオング

今でもあの歌を、ぷんぷんと二人で歌うことがある。

大量の飲み物は、料理酒まで飲み尽くされた。大盛会。

これは６ケ月後のほんとの
ロイカトンパーティのひとこま

パティバット、ドランク、水では酔いません
壁の模造紙はあみだくじの後

そして、こんな楽しいパーティーはなかったと、口々に言ってもらった。欧米の人のパーティーは、もう少し、お行儀がいいのである。

これは、ほんの始まりであった。

こんなのをしょっちゅう、やるのである。けれども、まんたんとぷんぷんにとっては非常に大きな分かれ道だった。その後のタイでの生活をほぼ、決定づけた感じがしたのである。

タイ 77・レディースのふるまい

お集まりは、めんどくさくも楽しくて、まんたんは臆病で英語がだめなので、まず揉め事なんてことにはならないのだけれど、心痛むこともあった。

その、とてもお若いアジア系の奥さんがコーヒーモーニングにやってきたときの感じは、実に奇妙なものであった。

とてもセクシーなお洋服で、大声でレディースに挨拶の言葉をかけ、ここまでは、注目を集めたってことでどうってことはないんだけど、お話がどうも、あまりお品がよくなく、まんたんが下を向いてしまう感じだったのだ。

そのときの、他のレディースの何事もないというふるまいは見事に徹底していて、見事すぎてこわいくらいだった。

INVITATION

Coffee-morning
SALE

CAMBODIAN SILVER
and
VIETNAMESE HAND-EMBROIDERED
TABLECLOTHS

ある日のコーヒーモーニング招待状

まんたんが、席のなかった最年長のパットに譲った１人がけのソファに割り込み、セルフサービスなのにコーヒーを持ってこいと騒ぎ、誰にも相手にされないので、まんたんに話しかける。

まんたん「日本文学が専攻で英語はだめなのよ」（日本では口にできない）

奥さん　「まんたんの英語はとてもいい（言っておくが、こう言われたらひどい英語だということである）。私だって同じよ」

ここで終っておけばよかったのに、まんたんは余計なことを言ってしまった。
「私はあなたと同じではない。私には私の国があり、家族があり、友人があり、私のバックグラウンドがあるのだ」

彼女は、つっと席を立って帰ってしまった。

イギリス人のセルマが威厳を正して、「まんたん、あなたはよくやった。彼女はプロスティチュートだ」と言った。

その後、どんなお集まりでもその若い子供のような奥さんと会うことはなかった。今思うと、彼女は慣れない国の暮らしで少し壊れていたのだ。なんて、心無いことを言ってしまったものかと、胸が痛む。

第 18 部　ロイヤルの雛壇

タイ 78　タイマッサージ

タイのマッサージが有名だというのは、行く前から知っていたが、ラヨンにあるかどうかわからなかったし、なかなか機会がなかった。

週末にクンチャイに、ラヨンにマッサージはあるのかと聞くと「もちろん、すぐいける」というので、スクムビットロードのマッサージのお店に連れて行ってもらった。

その名はロイヤル。

ここで、まんたんとぷんぷんは、ぎょっとしたのである。

ロイヤル入口、初めて行った頃はまだ改築中
おどろおどろしかった、中はもっと・・・・・

タイ 79　ロイヤルの雛壇

ロイヤルの入口を入って、まんたんは、息を飲んで固まってしまった。ぷんぷんの顔を伺うと、ぷんぷんも「う～む」と笑っている。

張り巡らされたガラスの向こうに、階段のような壇があって、そこには厚化粧の女の人たちが、胸に数字の番号札をつけて座っているのである。まんたんは、いかがわしいマッサージではないかとドキドキしてしまった。

クンチャイに聞くと、「ノープロブレン。ここはよいマッサージだ」という。

いいんだろうか、帰った方がいいんじゃないだろか。迷ったけれども、クンチャイもこう言ってるしと、思い切って、あまり美形でない人を選んで、指名した。

タイ 80　いかがわしいなんてとんでもない

最初に、お風呂の洗い場のようなところで、足を洗ってもらう。次に、マットレスを敷いたお部屋に案内されて、薄手の柔道着のようなものに着替えて、いよいよ、伝統のタイマッサージがはじまった。

すごかった。足、腕、肩、頭、顔、背中、足裏。全身を全力でマッサージしてくれるのである。

何度か「ジェップ、ジェップ（痛い）」と叫ばなければならなかった。うつぶせになって膝を折ったと

き、その上を歩いているのだとわかったときには、本当にびっくりした。海老反り、腰の関節鳴らしには、恐怖を感じた。

いかがわしいなんて、とんでもなかったのである。

1 時間 400 円。まんたんとぷんぷんは、マッサージのとりこになった。パタヤでも、バンコックでも、マッサージはあったけれども、このロイヤルが最高であった。平気で 4 時間とか、お願いするようになったのである。

懐かしい。ほんとに、ロイヤルが恋しい。

最後に行った時のマッサージ担当
力は強い、33 番が最もうまかった

第 19 部　お寺訪問

タイ 81　ピーのこと

お家の庭に小さな祭壇があって、お花やお供物が供えられているのに気がついたのは、ラヨンに着いてすぐだった。人の背ぐらいの高さで、丸い棒の上に 50 センチほどの四角の台が載っているものであった。

名だたる仏教国である。仏さま関係のものと思って疑わなかったけれど、それが、違っていたのである。

クンチャイに聞くと、ピーだという。正確にはわからないのだけれど、仏さまの他にタイの人は精霊を信じていて、その精霊が守ってくれるように、悪さをしないようにお祭するのだという。

これはバンコックにある本格的なピー
実際は家の前に郵便受けのように小さくあります。

そして、バナナのピーの話をしてくれた。貧しいけれど勤勉な若者のところに、ある晩、美しい若い女の人が現れて、身の回りの世話をして、一緒に暮らしてくれるようになったという。その女の人は人間ではなく、バナナのピーだったというのである。

まんたんは、すぐに「鶴の恩返し」の話を思い出した。鶴女房の系列のお話は多い。東南アジアに広く語られるのが、クンチャイの話で実感された。

おそらくは仏教以前からこの国にあって、今も残っている古い、古い伝承の形が残っているのだろう。それが、バナナの精霊であるというのが、タイらしくて、まんたんは何度もクンチャイにバナナのピーの話をせがんだ。

そして、聞くたびに、若者の幸福を思い、この話を伝えてきたタイの人たちの思いにひたった。クンチャイは、マダムがなぜこの話を好きなのか、悩んだのだと思う。

それから、精霊の宿る木とか、幽霊がでる三叉路とか、連れていってくれるようになった。

タイ 82　お寺訪問

飛行機から、初めて認識したタイの建物は、赤い屋根のお寺だった。

クンチャイに頼んで、クンチャイの帰依するお寺に連れて行ってもらった。クンチャイは、大喜びでグレートなブッダのところに案内してくれた。

お寺はやはり赤い屋根で、平屋作りだけど床が高く、階段を登って行かなければならない。階段を登るまえに、靴を脱がなければならない。お堂には、一段高いところに仏像があり、3 回土下座するおまいりをした後、仏像を背にした住持の高僧とお話した。

ラヨンの高僧です
神妙な 2 人、日本人ですから正座できます

お坊さま「日本では何というブッダのところにいくのか」
（クンチャイは、仏教、僧、仏教徒のすべてをブッダというので不確かなんだけど）
まんたん「私はドーゲン、夫はホーネン」
（曹洞宗と浄土宗の開祖を言っておいた）

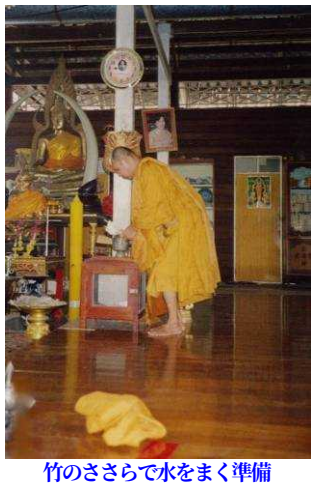
お坊さま「日本では、僧に妻がいると聞いたが本当か」
まんたん「お坊さまには 2 種類あって、奥さんのいるお坊さんもいるし、お山にいるお坊さんは奥さんは持たない」

お坊さま「日本ではどのように祈るのか」
まんたんは両手をあわせて、般若心経をあげた。

お坊さま「何を願っているのか」
まんたん「健康で幸福にタイで暮らせますように願っている」

そうするとお坊さまは、山上の垂訓のようなお説教をして、竹のささらで、お鉢の水をクンチャイとまんたんにかけてくれた。

こういうとき、どうすればいいかわからなかったので、封筒に「御布施」と書いてお渡しした。


竹のささらで水をまく準備

お寺のお堂の中
結構きれいでしょう

まんたんはクンチャイに意地悪く聞いた。ナンバー2 がいて、お坊さまの山上の垂訓に反しないのかと。クンチャイの答えがふるっていた。「5 分だけ。それでも、オーケー」

あぁ！

お堂は静かで、このお坊さまは立派で、まんたんはよくここを訪ねてお参りして、お話した。クンチャイは大得意であった。それはそうである、エクスパッツでお寺通いをするのは、まんたんだけだったのである。

第 20 部　バンムングラ病院

タイ 83　肝炎

エクスパッツが劇症肝炎になって、フロリダの病院で治療を受けているということは、レディースクラブの機関誌で知った。ラヨンで発病した彼は、ヘリコプターでバンコックに搬送され、さらにシンガポールの病院に搬送され、やや経過をみたところで、アメリカに帰ったという。

まんたんは、すごいなぁ、いくらお金がかかったろうか、と下世話な感心の仕方をした。

そして改めて、ぷんぷんの契約書を見ると、ぷんぷんもまんたんも同じように面倒を見てもらえるとあった。タイだけではなかった。世界中のその会社のエクスパッツは同じサービスを受けられるのであった。

まんたんは、また、すごいなぁと感心した。

世界中で仕事をするためには、人材を集めるために、当然のようにそういう契約があるのであった。日本にこれができるだろうかと、溜め息が出た。

日本で受けた肝炎の予防注射は、有効期間の短いものだったので、ラヨンで長く効くお注射をするように指示があった。

手渡されたカード
世界どこでも使える

タイ 84　バンムングラ病院

肝炎の予防注射を受けるために、ラヨンで一番立派で、英語も通じるというバンムングラ病院に、まんたんはお注射の予約をしに行った。

驚いた。まるでホテルのように立派な病院だった。いや、PMY ホテルよりははるかに立派だった。田んぼの真ん中にあるのだけれど、広い駐車場、天井の高い受付、日本では望むべくもない愛想のいいスタッフ、本当に素晴らしい病院だった。

まんたんは、医療は日本がアジアでは一番という考えがあったので、驚いたのだと思う。水準はともかく、施設は残念ながら、日本はラヨンにも劣る。

前にも出てきた
バンムングラ病院の診察券

タイ 85　問診票

受付では、問診用の用紙があって、ぷんぷんと 2 人分のを書いた。おもしろかったのが、国籍、住所、髪の色、目の色の他に、宗教という欄があったことである。

さて、困った。

幼稚園は真宗大谷派のお寺、学校はプロテスタント系、結婚式は神式、実にいい加減なまんたんなのである。タイの仏教におもねって仏教徒であることにした。

まんたんは家に帰ってから、ぷんぷんにモスリムだったりすると入院時に食事とかに気を配ってくれるので、宗教欄があるのだろうと報告した。

ぷんぷんは、死んだ時のために、葬式のスタイルを知っておく必要があるんだろうと言うのであった。

タイ 86　カバ A

お医者さんに、問診票を持っていって、A 型肝炎の予防注射の有効期間の長いのをお願いしたいと頼んだ。ハンサムなお医者さんは、血液検査をして、それを見て、2 回お注射が必要だと言った。そう、3 回病院に行くのである。

まんたんは、東南アジアの衛生についてのこわーい本を読んでいたので、お医者さんにとにかく、使い捨ての注射器を使ってくださいと、必死で頼み込んだ。肝炎の予防注射でエイズに感染したりしたら大変だと思ったのである。

そして、家に帰って気がついたのである。

注射器にこだわるあまり、肝心の「肝炎」を間違えたのである。ヘパティティス A というのを、ヒポポタマス A と病院で叫んでいたのである。

ぷんぷんは、「カバ A の予防注射をしてもらうんだね」とゲラゲラ笑った。

やさしいバンムングラ病院の人々は、わかってくれたのである。わかってくれたが、カバにならない注射があったらどうしようと心配になった。

第 21 部　青いバンコック

タイ 87　青いバンコック

タイに行くとき日本のタイ大使館で、3 ヶ月の滞在許可と 3 回の入国許可証をもらって行った。これが切れる前に、ぷんぷんは就業許可つきの滞在許可、まんたんはその家族としての滞在許可を取得しなければならなかった。

ジム・ホートンがバンコックの弁護士のところに行ってその手続きを頼んでくるようにと車とホテルの手配をしてくれた。

バンコックに行ける！

まんたんは興奮した。バンコックには日本のデパートも日本料理店もあるし、日本食の材料も売っている。嬉しくて、嬉しくて、おおはしゃぎした。

ラヨンに来るときに迎えに来てくれた、藤岡琢也さんそっくりな運転手さんが迎えに来てくれて、あっという間にバンコックの近くまで到達した。

バンコックは青いもやにおおわれているように見えた。その理由は、街に入ってわかった。朝の通勤時間帯でものすごい渋滞と排気ガスなのである。歩いた方が早い感じがしたが、藤岡さんが連れてってくれないと、弁護士事務所がどこかわからないので、仕方なく渋滞に耐えた。

これはきれいなバンコック
逆光のワットアルン

タイ 88　かわいい弁護士さん

スクムビットロードの高層ビルに弁護士事務所があった。まんたんは、タイとアメリカと両方の弁護士資格を持っているというので、なんとなく、年配の男の弁護士さんというようなイメージがあった。

受付の人に案内されてお部屋に行くと、弁護士さんは、女の人で、それもまるで中学生のような人だったので、びっくりした。これは、まんたんの偏見で、驚きとともに深く反省した。タイでは、女の人でも若くても実力があれば、評価される証拠のような気がした。

ジムから準備してもらった書類を渡すと、「最善をつくします」で、それで終わりだった。なんだか、1 泊でバンコックに来られて儲けたような気がした。

タイ 89　ホテルの前のできごと

ワールド・トレイディング・センターに日本のデパートがあるので、ホテルは近くのをとってもらった。もう、こんないいお部屋には泊まったことがなかったのでまんたんは感激。さらに感激するべく、日本料理のレストランに出かけることにした。

ぷんぷんが一足はやく、部屋を出た。後を追ってまんたんがホテルを出ると、ぷんぷんがタイの人と話をしていて本を見ていた。

「ぷん、ぷ～ん」とかけよると、まんたんに気付いたタイの人は、本をパタンと閉じて、どこかに行ってしまった。

「なんだったの？」と聞くと「写真だって」と、ぷんぷん。「まんたんも見たい」とそのタイの人を目で探すと、ぷんぷんは、まじめな顔をして、「まんたん！よしなさい。女の人が見る写真じゃない」

バンコックのホテルの前には、写真集を持った人が待っていることがあります。

タイ 90　いいなぁ、バンコック

日本のデパートには、日本のものが何でもあった。本屋さんも食品も日本米も正露丸もあった。まんたんは、ためいきをついた。

いいなぁ、バンコック。東京にいるのと同じじゃないか。タイにいるといっても、ラヨンとは大違い。そして、少しせつなくなった。

ぷんぷんは、「まんたん、バンコックにくればいいんだよ。1 週間に何回かバンコックに買い物にくればぁ」と、なぐさめるのであった。

「そうだ、そうだよね。来ればいいんだ」

まんたんは素直なので、その気になって元気になった。

関係ない写真
バンコックもいけど
アユタヤもよいです

第 22 部　喪に服してるわけ？

タイ 91　王母殿下崩御

翌朝、ドアから差し込んであったバンコック・ポストは王母殿下の崩御を伝える記事でいっぱいだった。その取り扱いを見て、まんたんは、これはとピンと来るものがあった。

藤岡さんが迎えに来てくれるまでに山のような買い物をしたのだけれど、黒のお洋服を何着か買った。バンコックではもう、黒い服装の人を何人も見かけた。

国家的事件だったのである。黒いお洋服を買ったのも正解だったのである。

タイ 92　出家 120 人

王室に対するタイの人の尊崇の念は高いのは知っていたけれど、王母殿下の崩御を悼んで、ラヨン県の警察官 120 人が出家したとクンチャイに聞いてさすがにまんたんは驚いた。

まんたんが黒い服を着ていると、大勢のタイの人が「ビューティフル～」と声をかけてくれた。別にまんたんが美しかったのではない。弔意を表したことに対する謝意という感じだった。

買い物に行ってもおまけをたくさんもらった。忘れられないのは、郵便局だった。局長さんは英語のわかる人だったので、「王母殿下の崩御のお悔やみを申し上げます」というと、目をうるませて「王母殿下の崩御をお悔やみ申し上げます」と応えてくれた。

なんだか、王母殿下の親戚になったような感じだったが、それから局長さんはたいそう親切にしてくれて、帰国までほんとうにお世話になった。

喪に服している間会社のゲートに
掲げられた王母殿下の写真

タイ 93　喪に服してるわけ？

その時期、パーティーがあった。

ぷんぷんは反対したけれど、まんたんは黒のお洋服にした。言葉の感じから、アメリカ人だと思われる知らない人から「喪に服してるわけ？」とからかい半分に言われたので、日本の国葬の際に、タイとタイの人が喪に服してくれたのだと説明した。

それを、エクスパッツ担当のイギリス人が黙って聞いていた。

翌日、会社でエクスパッツ全員にメールが届いた。「派手な色、デザインの服装を避け、タイの国民感情を尊重するように」ぷんぷんからそれを聞いて、イギリス人の顔を思い出した。

白状すると、日本の国葬の際には、まんたんは別に黒いお洋服は着なかったのだ。

違うときのパーティ
シックな何と手縫いの着物
でもパーティが多い

タイランドエッセイ　第１巻　改訂第３版

2004年　5月30日　初版第１刷発行
10月28日　初版第２刷発行
2005年 11月　5日　改訂第１版第１刷発行
2006年　8月30日　改訂第２版第１刷発行
10月　4日　改訂第３版第１刷発行

著者：　青沼　祐子
編集：　青沼　修司

発行：　SANDY Office
Yokohama, Japan

印刷：　SANDY Office
製本：　SANDY Office

Printed in Japan
Copyright ⓒ 2006 SANDY Office

本書の内容を無断で転記、転載することを禁じます。